

金属人間

海野十三

青空文庫

こんな文章

およそ世の中には、人にまだ知られていない、ふしぎなことがずいぶんたくさんあるのだ。

いや、ほんとうは、今の人々に話をして、ふしぎがられる話の方が、ふしぎがられない話よりもずっとずっと多いのだ。それは九十九対一よりも、もっととびはなれた比であろうと思う。

つまり、世の中は、ふしぎなことだらけなのだ。しかし、そう感じないのは、みなさんがたがどこにそんなふしぎなことがあるか知らないからだ。また、じっさいそのふしぎなものに行きあつていても、それがふしぎなものであることに、気がつかない場合が多い。

それからもうひとつ――。

人間の力では、どうにもならないことがある。それは運命ということばで、いいあらわされる。この運命というやつが、じつにふざけた先生である。運命に見こまれてしまうと、

お金のない人が大金持になったり、またはその反対のことが起こったり、いや、そんなことよりも、もっともつと意外なことが起こるのだ。

宝くじの一等があたる確からしさを、いわゆる確率かくりつの法則ほうそくによって計算することができる。その法則によって出てきたところの「宝くじの一等があたる確からしさ」の率は、万人に平等である。その当せん率のあまりにも低いことを知って、万人は宝くじを買うことをやめるはずになっている。その確率の法則を作った学者や、それを信奉しんぼうする後続こうぞくの学究がっきゅう学徒がくとの推論すいろんによれば……。

だが、事実はそうでなくて、宝くじがさかんに売れている。それはなぜであろうか。それは、とにかく事実一等にあたって二十万円とか百万円とかの賞金をつかむ人が、毎回十人とか二十人とか、ちゃんと実在じつざいするので、自分もそのひとりになれないこともないのだと、さてこそ宝くじを買いこむのである。

その人たちの感じでは、当せん率は、確率の法則が算定してくれる率よりも、何百倍か何千倍か、ずっと多いように感ずる。これはいったいなぜであろうか。

一言でいうと、世の中の人々は、確率論をまもる学者よりは、ずっと正しく、運命を理解しているからだ。すなわち運命がおどけ者であるということ、わきまえているのであ

る。とうぜんとつぴようしもない出来事をおこさせるおどけ者の運命は、案外わたくしたちの身近に、うろろうしているのだ。奇蹟きせきといわれるものは、案外たびたび起こるもので、わたくしの感じでは、一カ月にいつペンずつぐらいの割合で、奇蹟がおこっているのではないかと思う。

ふしぎと運命と、そしてひんばんに起こる奇蹟とに「世の人々よ、どうぞ気をおつけなさい」と呼びかけたい。

一月十日

金属Qを創造する見込みのつきたる日しるす

理学博士 針目左馬太はりめさまた

次の語り手

右にかかげた日記ふうの感想文は、その署名によって明らかなどおり、針目博士はりめはくしがした

ためたものである。

これは博士の書齋にある書類棚の、原稿袋の中に保存せられていたもので、後日これを発見した人々の間に問題となつた一文である。

みなさんは、針目左馬太博士のことについて、今はもうよくご存じであろうから、べつに説明をくわえる必要はない。だが、この事件の起こつた当時においては、この若き天才博士のことを、世の人々はほとんど知らなかつたのである。

博士は、わずか二十三歳のときに博士号をとつてゐる。その論文は「重力の電氣的性質、特に細胞分子間におけるその研究」というのであつた。これは劃期的な論文であつたが、またあまりにとつびすぎるといふので、にがい顔をした論文審査委員もあつた。しかしけつきよく、これまでにこれだけのすぐれた綿密な境地を開いた学者はいなかつたので、この博士論文は通過した。そのかわり、審査に一年以上を要したのであつた。

その間に針目博士——いや、まだ博士にはなつていない針目左馬太博士は、大学の研究室を去つて、みずから針目研究室を自分の家につくり、ひたむきな研究に没頭した。

さいわいにも、針目博士の家は、曾祖父の代からずっと医学者がつづいており、曾祖父の針目逸齋、祖父の針目寛齋、父の針目豹馬と、みんな医学者であり、そして邸内

に、古めかしい煉瓦建ではあるが、ひじょうにりっぱな研究室や標本室、図書室、実験室、手術室などがひとかたまりになった別棟の建物があったのである。当主である彼、左馬太青年がそこを仕事場にえらんだことは、しごく自然であった。

不幸なことに——他人が見たら——かれは、もつか身よりもなく、ただひとりであった。両親と弟妹の四人は、戦争中に疎開先で戦災にあつて死に、東京で大学院学生兼助手をして残っていた、かれ左馬太だけが生き残っているのである。そういう気の毒なさびしい身の上であつたが、かれ自身はいつこう気にかけていないように見え、その広い邸宅に、四人の雇人とともに生活していた。

博士論文が通過するまでの約一年間に、かれがまとめあげた研究論文は五つ六つあつた。その中に、特にここでごひろうしておきたいのは「細胞内における分子配列と、生命誕生の可能性、ならびにその新確率論による算定について」というのであつた。

この論文といい、また博士論文に提出したあの論文といい、かれが研究の方向を、細胞の分子に置いていることが、これによつてうかがわれる。こういう研究の領域は、わが国はもちろん、世界においても今までに手がつけられたことがなく、じつに研学の青年針目左馬太によつてはじめて、メスを入れられたところのものであつた。

しかもかれは、すこぶる大胆にも「生命の誕生」という問題を取り上げているのだった。はたしてかれの論文が正しいかどうかは別の問題として、かれはつぎのようなことを結論している。

(——細胞内における分子が相互にケンシテイションをひき起こし、そのけつか仮歪^{かわけい}のポテンシャルを得たとすると、これは生命誕生の可能性を持ったことになる) 云々。これが重大なる結論なのである。生命が誕生する可能性をもつ条件が、要約せられているのである。

しかし、ケンシテイションとはどんな現象なのか、仮歪^{かわけい}のポテンシャルとはどんな性質のものか、それについてはこの論文を読んだ者はひじょうな難^{なんかい}解^{かい}におちいる。だが針目青年には、これがよくわかっていて、論文中いたるところにこれを駆使^{くし}している。思うに、この二つの専門語を知るためには、これよりもまえに書いた、彼の他の論文を読破^{どくは}しなければならぬであろう。

それはともかく、かれの研究は生命誕生の可能性にまで達していると思われる。これはこれまでの生物学者も医学者も、まったくふれることのできなかつた難問題である。それを二十歳を越えたばかりの白^{はくめん}面の青年学徒が、みごとに手玉にとっているのであるから、

なんといつてよいか、じつに^{げんしりよくこうし}原子力行使につぐ劃期的な文明開拓だといわなければならぬ。もつとも、世の多くの^{がんめい}頑迷な学者たちは、にわかはこの青年学徒のしめすところの結論を信用しないであろうけれど……。そして読者諸君はこれからくりひろげられる物語の事実により、はたしてかれの研究が本ものか、それとも^{けっかん}欠陥があるかを判定されればよいのである。

さてここで、さきにかかげた博士の日記ふうの随筆にもどるが、その内容は、さほど^き奇抜^{ばつ}すぎるといものではない。あそこに述べられたような感じは、われわれとても、ふだんふと心の中にいただくことがある。

じつは、右の内容について、大いに気にしなければならぬことがあるのであるが、ここにはふれないでおく、それはいずれ先へ行つてから、いやでもむきになって掘りかえさなければならぬ時がくるのであるから。

ただ、ここにはその文章の最後のところに書いてある一文について、読者の注意をうながしておきたいのだ。

すなわち、こうである。

(一月十日、金属Qを^{そうぞう}創造する見^み込^こみのつきたる日しるす)

とある。

おかしいとは思われないか。これまでずっと細胞分子の問題や、それに関連しての生命誕生のことなどばかりを取りあげていた針目博士が、こんどは急にがらりと目先をかえて、金属の製造研究に没頭していることである。

金属製造——と書いては、いけないかもしれない。博士は「金属Qを創造」としたためている。製造と創造とは、なるほどすこしく意味がちがう。しかし創造ということには製造することがふくまれているのだ。はじめて製造することが創造なのである。してみれば、ぞくつぽく金属製造といってもさしつかえないであろう。

いや、金属というものは、精錬せいれんされ、あるいは別のものに化成され、または合金ごうきんにされることはあるが、金属そのものを製造することはない——というひともあろう。つまり金属である銅とか鉄とかは、はじめからそういう形でこの地球に存在しているのであって、銅とか鉄などが製造または創造されるというのはおかしい。そういう抗議が出そうない気配けはいがする。

しかし、たしかに針目博士は「金属を創造する」と書いてあるのだ。ウラニウムをぶちこわしてカルシウムを製造または創造するとはいわないであろうか。

いや、それは潔癖けつぺきにいうと、製造ではないし、もちろん創造ではない。アダムの中からだから肋骨ろつこつを一本取り去ったとき、その直後のアダムのことを、前のアダムから製造したといわないのと同様である。

そうなる、針目博士が使用した「金属の創造」というのは、いったいどんな意味なのか、深い謎のベールに包まれているように感ずる。——まあ、そのことは、今は大目に見のがすこととして、「金属Q」というものはいったい何だと、ちよつと考えてみなければなるまい。

Qなどという記号の元素は、九十二または九十三の元素表げんそひょうの中にまったく見出されない。そうすると、金属Qなるものは、それ以外の新元素かもしれないと考えられる。これは誰でもそう考えるだろう。

つまり針目博士は、新金属Qをはじめ作りだす研究をやっていたものであるとするのである。元素表はもういっぱいであるのに、新元素があつてたまるものかとも考えたくなる。どんな奇抜な方法によつて、新元素を作り出したつもりでも、けつきよくは元素表にある元素の一つであるか、あるいはその同位元素であるところ、収斂しゅうれんしてしまふのがおちであろう。

だが、ここにもう一度よく考えてみなければならぬことがある。

それは、われわれのような俗^{ぞくじん}人が論ずるから右のようになるが、しかし非凡^{ひぼん}なる頭脳^{ずのう}と深遠^{しんえん}なる学識^{がくしき}をそなえた針目博士自身としては、新しい金属の創造などということは、けつして不可能なことではないと思われるのではあるまいか。そのへんのことは、われわれのうかがい知ることのできない領域^{りょういぎ}だと、一時しておこう。

そこでもう一度、本筋へもどつて考える。なぜ針目博士は、あのすばらしい生命誕生の研究をやりつぱなしにして、新金属などの創造にくらがえをしたのであろうか。惜^おしいではないか。

さあ、この答は、まったくむずかしい。博士は金属製造ということに、よほど強い魅^{みりょ}力を感じたのであるかもしれない。だが、金属製造などということが、生命誕生の研究いじょうにそんなに魅力があるとは思われないではないか。けつきよく察しられることは、二つである。かの生命誕生の研究がまったく行きづまってしまい、研究の方向をかえなくてはならなかったものか。それともひじょうに特別な場合として、金属製造という研究の命題が、特に博士をすっかりひきつけてしまうほどの、ある出来事があったのではなからうか。

たぶん、あとの方があたつていると思う。なぜと云つて、前の方のように、あれだけ研究をつんだ生命誕生の研究が、一夜でばつたり行きづまるようなことは、まずもつて考えられないからである。

そうなる、博士をきゆうに金属Q製造の方へひきつける動機となつた、そのある出来事なるものはいつた何であつたか、はなはだ興味をひかれる。——とにかくこの問題は、じつはまだ解とけていない。それで、それはそれとして、針目博士がとつぜんわれわれの前へ脚きやつこう光をあげてあらわれた、そのお目見得めみえの事件について、これから述べようと思う。それは恐ろしいなぞにみちた殺人事件であつた。針目博士邸において、お手伝いさん谷た間三根子にまみねこが密室においてのどを切られて死んでいた事件である。申しおくれたが、わたしは探偵蜂はちやじゆうろく矢十六やじゅうろくという者である。

密室の事件

この血みどろな事件を、あまりどぎつく記すことは、さしひかえたい。これはそういう血みどろなところをもって読者をねらうスリラー小説、もしくはグロ探偵小説とは立場を異ことにしているのであるから……

どのようにして谷間三根子たにまみねこが死んでいたか。そして、そこはどんなぐあいに外からの侵し入んにゆうをゆるさない密室であったか——を、まずのべたいと思う。

谷間三根子はお手伝いさんであった。としは二十三歳であった。お三根みねさんと呼ばれていたから、これからはお三根と書こう。

お三根は、ほかのお手伝いさんとはちがひ、ひとりだけ針目博士の研究所である煉瓦れんがだ建ての建物の中に部屋をあたえられて住んでいた。もっともそれは主家おもやから廊下ろうかがのびてきているとつづきの部屋であった。

お三根がそこにいるわけは、博士が仕事をしているとき、きゆうに雑用ができた場合に、すぐさまとんで行けるためだった。

博士は主家に寝室があつたが、研究は徹夜でつづけられることもすくなくなかつたし、またそのまま研究室の長いすで寝てしまうこともあつたから、どっちかというと、博士はいつも研究室の屋根の下で暮らしていたといったほうがよいであろう。

さてそのお三根は、三月一日の朝、いつまでたつても起きてくるようすがないので、朋輩の者どもがふしんに思い、お三根の部屋のまえに集まって、入口のドアをわれるようにたたきつづけた。

だが、お三根はやつぱり起きてこなかったし、部屋の中で返事もしない。そこで一同は、いちおう主人の博士のゆるしを乞うたうえで、力をあわせてそのドアをぶちこわしにかかった。

ドアには、内側からかぎがかかっていたので、このドアにみんなが力をあわせてからだをぶつつけてこわすしか、いい方法がなかったのだ。貞造という男と、お松とおしげと、ふたりのお手伝いさんの三人が、このドアにぶつかつたのだ。しかしなれない仕事のこととて、はじめはうまくいかず、からだが痛くなるばかりなので一息ついて休んだ。

「だめだねえ」

「だって、錠をこわすのはなんだかもつたいないようですね、力がはいらないよ」

「それどころじゃない。早くあけてみないとんだことになるぞ。お三根どんは死んでい
るんじゃないかね」

「まさかね。あんな元気のいい人が、心臓まひでもあるまいよ」

「さあ、もう一度力を出して、やってしまおう。こんどは何としてでも錠をこわしてしま
うんだよ」

三人は、ふたたびドアの方へよつてきて身がまえた。

と、そのとき部屋の中で、がちやんとガラスがこわれるような音がした。

「あれッ、中で音がしたよ」

「お三根さん、起きているんだよ。ひとが悪いわね」

そこで彼らは、かわるがわるお三根の名を呼んだ。だが、そのこたえはなかった。

「誰か中にいるんだよ。おお、こわい」

「ネズミじゃないかしら」

「ネズミがあんな大きな音をたてて、ガラスをこわすもんですか」

「とにかく、これはただごとじゃないよ。わしらだけであけるのはやめて、お巡りまわさんに
きてもらったうえでのことにしようや」

男の貞造が、そういつて尻しりごみをしたので、お松とおしげもきゆうに、こわさが増まして、
もう力を出す気がなくなった。

そこでもう一度、奥の主人にことわったうえ、おしげが交番へ警官を呼びにいった。

やがて若い警官の田口さんというのがきてくれた。そこでこんどは四人が力をあわせて、ドアにぶつかつた。

四、五回ぶつかると、錠じょうがこわれて、重いドアは風を起こして、さつと内側に開いた。

「ああッ……」

「こわい！」

ねまきを着たお三根が、入口からすぐ見える部屋のまん中に、あけにそまって倒れていった。

その部屋は、あとでたたみの間になおした部屋であつたが、広さは十二畳もあつた。お三根の寢床は左の壁ぎわにしいてあつたが、お三根の死体はその中にはなく、たたみの上にあつたのだ。

寢床は、この中で寝ていたお三根が何かの理由があつて、ふとんをはねのけてはいだし、たものと察せられた。

お三根は、左の頸動脈けいどうみやくを切られたのが致命傷ちめいしやうであることがわかつた。なお、お三根の両手両腕と顔から腕へかけたところに、たくさんの切りきずがあつたが、それはたいして深くない傷ばかりであつた。

お三根を殺傷した凶器は、なんであるかわからないが、なかなか切れ味のいい刃物であるらしく、頸動脈はずばりと一気に切断されていた。

死斑と硬直から推測して、お三根の死は今、暁の午前一時から二時の間だと思われた。警官の通報が本署へとんだので、検察局からは長戸検事の一行がかけつけた。

「……で、この部屋に死者のほかには誰かいたのかね。つまり午前九時に、この電灯のかさがこわれる音を、この雇人たちがたしかに耳にしたというが、このかさをこわした者は発見されたのかね」

検事が、たずねた。

「いえ。わたしたちが入りましたとき、部屋の中をよく探しましたが、誰もいなかったのです。この婦人の死体だけでありました。凶器も見あたりません。部屋としてはそこは完全に密室なのです。そこから犯人の侵入した形跡がないのです。ふしぎですなあ。まさかこれは自殺じゃないでしょう」

と田口警官はいった。

「自殺ではない。たしかに他殺事件だ。とにかくこれは容易ならぬ事件だ」
長戸検事は顔をしかめた。

いったいお三根は誰に、どうして殺されたのか。凶器はどこにあるのか。おなじ屋根の下に一生けんめい研究をつづけている針目博士に、この事件は関係が有るのかなのか。謎はいつとかれるのであろうか。

白昼の怪

長戸検事の面上に、ゆううつな影がひろがっていく。まったく奇怪な事件だ。

室内には、犯人のすがたが見つからない！

そしてこの部屋は密室で、出入りをする事ができないようにしまりがしてあった。凶器もまだ発見されない！

しかもあのとおり、若い婦人が頸動脈をみごとに斬られて絶命している！

けっして自殺事件ではない！

理屈にあわない事件だ。奇怪な事件だ。

いや、理屈にあわなはいとはいきれない。いま一時、この場のようすが理屈にあわなはいように見えるだけで、ほんとうは、これで完全に理屈にあっているのにちがいない。ただ、その正しい理屈が、まだ発見されていないのだ。とけていないのだ。

この一見、理屈にあわない事件の謎を、どうといたらいのか。

長戸検事が、次第にゆううつな顔つきになっていくのもむりはない。

「もう一度、この部屋をねん入りに捜査そうさしてくれたまえ。兇器きょうき、指紋しもん、証拠物件しやうこぶつけん、死者の特別の事情に関する物件など、よくさがしてくれたまえ」

検事は、連れてきた川内警部かわうちけいぶをはじめ、部下たちにそういつて捜査を再開させた。

「田口君、この家の主人には会見したのかね」

検事はそういつて、一番はじめにこの邸やしきへかけつけた警官にたずねた。

「いいえ、まだです」

「それは、どうして……」

検事は、合点がてんがいかないという。

「私は、ここへくる早々そうそう、この邸の雇人をつうじて会いたいと申しこんだのです。しかしその返事があつて『今いそがしいから会えない。邸内は捜査さうさご自由』ということなんで、

そのまま仕事を進めていました」

「なるほど。しかしそれは変っている人だなあ」

「それは検事さん。針目博士といえば、変り者として、この近所ではひびいているのです」
長戸検事はあとのことを、田口警官の顔の近くへ口をよせていった。

「きみは、これからその主人に会って、検事がお会いしたいといっている、会見を申しこんでくれたまえ」

「はい」

田口警官は、この部屋を出ていった。

長戸検事は、そのあとで室内をぐるぐる見まわしていたが、やがてかれの目は一点にとまった。それはこの部屋のまん中に、天じようからさがっている電灯でんとうのガラスのかさであつた。

検事は歩きだして、そのまま下までいった。かさは検事の頭よりわずかに高かつた。

「かけている。かさがかけている。新しいきずだ」

「ああ、そのガラスの破片はへんなら、ここにこれだけ落ちていました」

と、検事の部下の巡査部長の木村が、紙片に包んであつたものをひろげて見せた。

「その破片は、このかさにあうかしらん」

「はい。ぴったりあいます。さつきためしてみました」

検事は、まんぞくそうにうなずいた。

「この入口のドアをこわす前に、この室内でガラスのこわれる音がしたと、この家の人たちは証言しているが、そのときこわれたのは、この電灯のかさなんだ。すると、被害者ではない他の生きている人間が、そのときこの室内にいたことになる。おそらくそれが犯人であろう」

検事は、ここまでは明快な判断をくださった。しかしそのところでかれは、はたとつまつた。

「……しかるに、この部屋をひらいて中をしらべてみたが、被害者がいに人間のすがたはなかったのだ。おかしい。……犯人はどうしてもあ有的时候、この部屋の中にいたにちがいないのに、なぜすがたを見せないんだろう」

検事は、しきりに小首こくびをかしげている。

「検事さん。この部屋は密室と見せかけて、じつはどこかに秘密の出入口があるのでないでしょうか」

と、木村巡査部長はいった。

「そこから犯人は、いち早く逃げだしたという考えだね。そうなれば、早くその秘密の出入口を見つけてもらいたいものだ」

「いま一生けんめいに心あたりをさがしているんですが、まだ見つかりません。この家の主人が出てきたら、といただしていただくんですね。主人ならかならず知っているはずですから」

「なるほど」

「検事さん。この主人は、どうもくさいですよ。わたしは第六感でそう感じているんですが……」

といつているとき、とつぜん室内で大きな声が出た。

「あっ、やられたッ。誰か手をかしてくれ。足を斬られた」

その叫び声は、ふとつた川内警部の声だった。警部は部屋の一隅いちぐうにしりもちをつき、右足をおさえている。かれの顔には血の色がなかった。どうしたのだらう。誰に斬られたというのであろうか。

二重負傷事件

川内警部の両手は、鮮血せんけつでまっ赤だった。

後からわかったことであるが、警部の傷はかれの右足のすこし上にある動脈どうみやくが、するどい刃物はもので、すぱりと斬きられているのだった。だから鮮血がふんすいのようにとびだしたわけである。

検事たちがかけつけて、みんなで応急手当をくわえた。

「どうしたんだ。どうしてそんなけがをしたのかね」

検事はきいた。

「さあ、それがどうもわからないのですよ」

警部は顔をしかめて言った。

「こんなひどいけがを自分でする者はありませんよ。たしかに斬られたと思ったんですが……ところが、自分のまわりを見まわしても、誰も下手人げしゆにんらしい者がいない」

「じゃあ、やっぱり、けがだろう」

「けがじゃないですよ、検事さん」

と警部は承知しない。

「斬られたときはちやんとわかりました。足へ何だかかたいものがあたり、それから火をおしつけたような熱さというか痛みというか、それを感じました。わたしはちようど押入^{おしい}れをあけて、中にあつた木の箱を持ちあげていたので、すぐには足の方が見られなかつたんです。箱をそこへおいて、そこから足の方を見て、ズボンをまくってみるとこれなんです。ズボンも、こんなにさけています。しかしこれは刃物がズボンの中から外へ向けていますね。外から刃物があつたんじゃないです」

さすがに警部だけあつて、目のつけどころが正しい。しかしかれの足を斬つたという凶器はいつたどこにあるのか。

「その傷をこしらえた刃物^{はもの}は見つかつたかね」

検事がきいた。

「それがそれが……見つからないんです。おかしいですなあ」

「よく探してみたまえ。みんなも、手わけをしてさがしてみるんだ」

検事の命令で、捜査係官は警部のまわりを一生けんめいにしらべた。押入れ、ふとんの
中、ふとんの下、かもし、床の間、つんである品物のかげ——みんなしらべてみたが、ナ
イフ一ちよう出てこなかった。

「へんだなあ。なんにもないがねえ」

「そんなに深い傷をこしらえるほどの品物もないしねえ……」

まったくふしぎなことである。

そのとき田口巡査が入ってきて、このありさまを見るとびっくりして、警部のそばへよ
つてきた。

「どうなすつたんですか」

「足を斬られたらしいんだが、その斬った兇器きようきが見あたらないんだ」

「おお、田口君。きみはいつたいどうしたんだ」

検事が、とんきような声を出した。

「どうしたとは、何が……」

田口はげげんな面持ちおもてである。

「きみの顔から血が垂たれている。痛くないのか。ほら、右のほおだ」

「えっ」

田口はおどろいて、手をほおにあてた。その手にはべっとり血がついていた。同僚どうりょうたちは、みんな見た。田口の顔の半分がまっ赤にまっつたのを。

川内警部の負傷といい、今また田口の負傷といい、まるでいいあわせたように、同じ時に同じような傷ができるとは、どうしたわけであろうか。

「やつぱり、そうだ。するどい刃物でやられている。きみは、自分のほおを斬られたのに、そのとき気がつかなかったのかい」

「さっぱり気がつきませんでした」

「のんきだねえ、きみは……」

検事があきれ顔でそうだったので、同僚たちも思わず笑った。

「今になって、ぴりぴりしますがねえ」

「いったい、どこで斬られたのかね」

「さあ、それが気がつきませんで……いやそうそう、思いました。さつき針目博士の室の戸口をはなれて廊下をこっちへ歩いてくるとちゆう、なんだか向うから飛んできたものがあるように思っつて、わたしはひよいと首を動かしてそれをよけたんですがね。しかし、

なにも飛んでくる物を見なかったんです。ぱっと光ったような気がしたんですが、それだけのことです」

「きみは、どっちへ首をまげたのかい」

「左へ首をまげました」

「なるほど。首をまげなかったら、きみももつと深く顔に傷をこしらえていたかも知れないね。生命^{いのち}びろいをしたのかもしれないぞ」

検事にそういわれて、田口巡査は首をちぢめた。

「しかしわたしは何者によって、こんなに斬られたんでしょうか」

「田口君。それは今一足おさきに斬られた川内警部も、おなじように首をひねっているんだ。これは大きな謎だ。だが、その謎は、この邸^{てい}内^{ない}にあることだけはたしかだ」

と、長戸検事は重大なる決意を見せて、あたりを見まわした。

飛ぶ兇器^{きようぎ}か

ふたりの係官の負傷の担当はすんだ

川内警部はかなり出血したが、この家のお松とおしげが持ってきたブドー酒をのんだあと、すっかり元気をとりもどした。

「ああ、検事さん。かんじんの用むきを忘れていましたが、さつき針目の室まで行って博士に会い、あなたが会いたいといっけいられることをつたえようとしたんですが、博士は入口のドアをあけもせず、〃会ってもいいが、いま仕事で手がはなせないから、あとにしてくれ。あとからわたしの方で行くから〃といっけ、さっぱりこっちの申し入れを聞き入れないんです」

「なるほど」

「わたしはいろいろ、ドアをへだててくりかえしいってみたんですが、博士はがんとして応じません。ろくに返事もしないのですからねえ、係官を侮辱ぶじよくしていますよ」

田口警官は、ふんがいのようすであつた。

「向うでいま会いたがらないのなら、会わないでもいいさ」

と検事はさすがにおちついてた。

「しかしこの怪事件について、博士はじぶんの上に疑惑ぎわくの黒雲こくうんを、呼びよせるようなことをしている」

「ねえ、ながと長戸さん」

と川内警部かわうちけいぶがいった。

「わしはこの邸やしきにはふつうでない空気がただよっているし、そしてふつうでないからくりがあるように思うんですが……。で、例のするどい刃物を、何か音のしない弓かなんかで飛ばすような仕掛けがあるのではないでしょうか。博士というやつは、いろいろなからくりを作るのがじょうずですからね」

「きみの足首を斬った犯人が姿を見せないの、きみはからくり説へ転向したというわけか」

検事はやや苦笑した。

「どこか天井よう穴があるとか、壁の下の方に穴があるとかして、そこからびゅーツと刃物のついた矢をうちだすのじやないですか。この家の博士なら、それくらいの仕掛けはできないこともありすまい」

「刃物を矢につけて飛ばすとは、きみも考えたものだ。しかしその刃物も、見あたらない

じゃないか」

「いや、まだわれわれの探しかたがたりないのですよ。兇器がなくて、ぼくや田口がこんな傷をおうわけはないですからね」

そういつているところへ、戸口からのつそりとこの室内へはいつてきた者があつた。

近眼鏡きんがんきょうをかけた三十あまりの人物だつた。あおい顔、ヨモギのような長髪ちようはつがば

さばさとゆれている。下にはグリーンの背広服を着ているが、その上に薬品で焼け焦げのあるきたならしい白い実験衣じつけんいをひっかけている。

紫色の大きくなくちびるをぐつとへの字にむすんで、お三根みねの死体をじろりと見たが、べつにおどろいたようでもなく、かれは視線を係官の方へうつす。

「ぼくが針目です。ぼくに会いたいといつていられたのはどなたですか」

検事はさつきからこの家の主人公である針目博士が入つてきたことを知っていたが、博士がどんな挙動きよどうをするかをしばらく見定めたいと思つたので、今まで知らぬ顔をしていたのである。

「ああ、それはわたしです。わたしが会見を申しこんだのです。検事局の長戸検事です」
 検事ははじめて声をかけた。

「検事！ ふーン。お三根みねの死因はわかりましたか」

博士はひややかに聞く。

「わかりました。頸動脈けいどうみゃくをするとい刃物はもので斬られて、出血多量で死んだと思います」

「自殺ですか。それとも……」

「自殺する原因があったでしょうか」

検事は、ちよつとしたことばのはしにも、職業意識をはたらかして、突っこむものだ。

「知らんですなあ」

博士は、両手をうしろに組んで、ぶつきらぼうにものをいう。

「わたしどもは、他殺事件だと考えています」

「他殺？ ふーン。下手人は誰でしたか」

博士はおなじ調子できく。

「さあ、それがもうわかっていれば、われわれもこんな顔をしていないのですが……」

と検事はちよつと皮肉めいたことばをもらし、

「真犯人をつきとめるためには、ぜひとも、あなたのお力ぞえを得なくてはならないと思いますして、会見をお願いしたわけです」

「ぼくは、何もあなたがたの参考になるようなことを持っていないのです。生き残った者に聞いてごらんになるほうがいいでしょう」

「それはもうしらべずみです。あとはあなたにおたずねすることが残っているだけです」
「ああ、そうですか。それなら何でもお聞きなさい」

あざ笑う博士

そこで検事は、型のとおりに昨夜お三根が殺される前後の時刻において、博士はどんなことをしていたか、叫び声を聞かなかったか。格闘の物音を耳にしなかつたか。犯人と思われる者のすがたを見、または足音を聞かなかったか。それから最初にこの事件に気がついたのは何時ごろだったか、などについて訊問しんもんしていった。

これに対する博士の答えは、かんたんであり、そして明瞭めいりょうであった。

それによると、博士は昨夕さくゆういろいろ、徹夜実験をつづけていたこと。犯行の音も聞かず、

犯人のすがたも見なかったこと。そして博士はその徹夜のうち、二度ばかり実験室を出てかわやへいっただけで、他は実験室ばかりにいたことを述べた。

検事は、博士のことばについて、いろいろともものたりなきを感じた。あれだけの殺人が、十間^{けん}ほどはなれているにしても、同じ屋根の下で行なわれたのに、被害者の声も耳にしなかったというのはおかしく思われた。

「じゃあ、誰がお三根を殺したと思われませんか。ご意見を参考までにお聞きしたいのですが」

「知らんです。人の私行^{しじこう}については興味を持っていません」

「まさかあなたがその下手人ではありませんまいね」

検事のこのことばは、はじめてこの無神経な冷^{れい}血^{けつ}動^{どう}物^{ぶつ}のような博士を、とびあがらせる力があつた。

「な、何ですって。ぼくが殺したというのですか。どこにぼくがこの女を殺さねばならぬ必要があるのです。さあ、それをいたまえ、早く……」

長身の博士が、髪をふりみだして、両手をひろげて検事の方へせまったかっこうは、とてもものすごいものだった。

長戸検事はたじたじとうしろへ二、三歩さがってから、博士をおしもどすように手をふった。

「なぜそんなに興奮なさるんですか。わたしとしては、今の質問にイエスとかノウとか、かんたんにお答えくだされればそれでよかったです」

「失敬な……」

と博士はやせた肩を波うたせて、ふうふう息を切っていたが、

「もちろん、ぼくはこんな女を殺したおぼえはない」

「この邸にはみような仕掛けがあると知っている者があるんですがね、お心あたりはありませんか。たとえば、するどい刃物を矢のさきにとりつけたものを、弓につがえて飛ばせる。そして人間に斬りけるという……」

「はっはっはっ」博士は笑いだした。

「きみはずいぶんでたらめなことを聞くですなあ。それはおとぎばなしにある話ですか」

「いや、大まじめで、あなたのご意見をうかがっているのです。……そしてその恐るべき兇器きようぎは人目にもはいらぬ速さで、遠くへ飛んでいってしまう……」

「おとぎばなしならもうたくさんだ。ぼくはいそがしいからだ。もうこれぐらいにして

くれたまえ」

「お待ちなさい」

検事は手を前に出して博士を引き止めた。

「お三根さんがそのような兇器きようぎで殺されたばかりでなく、きょうここへきたわれわれの仲間がふたりまで、その同じ凶器によって重傷を負おっているのです。これでもおとぎばなしでしょうか」

「本当ですか」

博士は、はじめて真剣な顔つきになった。

「本当ですとも。川内警部と田口巡査のあの傷を見てやってください」

「ああなるほど。それでその矢はどこにあるんですか」

「それがああるなら、事件はかんたんになります。それがどこにも見えないから、われわれは苦労しているのです。あなたにうかがえば、その恐るべき兇器のからくりがわかるだろうと思つて、おたずねしているわけです」

「そんなことをぼくに聞いてもわかる道理どうりがない。捜査するのはあなたたちの仕事でしょう。徹底的にさがしたらいいでしょう。かまいませんから、邸内どこでもおさがしなさい」

「そういつてくださると、まことにありがたいですが、どうぞそれをお忘れなく——」
と検事はほくそ笑^えんで、

「では、あなたの実験室も拝見したいですし、それからこの天じよう裏をはいまわつてさがさせていたいただきたい」

「天じよう裏はいいが、ぼくの研究室をさがすことはおことわりする」

「今のお約束のことばとちがいますね。それはこまる。そしてあなたに不利ですぞ」

「……」

「研究室をさがすために強^{きょうけん}権を使うこともできますが、なるべくならば——」

「よろしい。案内しましょう。しかしはじめにことわっておくが、後できみたちが後悔したつて知りませんよ」

博士は何事かを考え、気味のわるいことばをはなつた。さて博士の研究室の中に、何があるのか。

待っていた奇々^{ききかい}怪々

係官の一行は、うすぐらい廊下を奥の方へと進んでいった。

先頭には、かなりきげんのわるそうな針目博士が肩をゆすぶって歩いている。そのすぐうしろに右頬を斬られ大きなガーゼをあてて、ばんそうこうで十字にとめた田口巡査がついていく。もしも博士が逃げだすようすを見せたら、そのときはすぐうしろからとびついて、その場にねじ伏せる覚悟をしている田口巡査だった。

それから少し歩幅ほはばをおいて、長戸検事を先に、残り係官一行が五、六名つきしたがっている。

検事の顔色は青黒い。細く見ひらいたまぶたのうしろに、眼がんきゆう球ゆうがたえずぐるぐる動いている。

それはかれが気持わるく悩んでいることを意味する。

(手がかりらしいものは、なんにもない。犯行だけが、二つ、いや三つもある。こんなことではこの事件はいつとけるかわからない。ぼやぼやするなよ、長戸検事)

そんな声が、検事の頭の中でどなり散らしている。これまで彼が現場へのぞめば、事件

解決のかぎとなる証^{しようこぶつ}拠物を、たちどころに二つや三つは見つけたものである。そして犯人はすぐさま凶^{ずぼし}星をさされるか、そうでないとしても、犯人のおおよその輪^{りんかく}廓はきめられたものである。

しかるに、こんどの場合にかぎり、そうではなく、さっぱり犯人の見当がつかないのである。そればかりか、事件そのものの性質がよくのみこめないのだ。

が、そんなことで考えこんで、多くの時間をつぶすわけにはいかない。事件の性質がどうあろうと、お三根はむごたらしく斬^{きりころ}殺されて冷たいむくろとなって隣室によこたわっているんだし、部下の川内警部は足を斬られて、げんに足をひいてうしろからついてくる。田口巡査はほおを切られて、あのとおり、かつこうのわるいガーゼを顔にはりつけているのだ。検事はいよいよくさらないでいらなかった。

だから検事としては、このうちは、あやしい針目博士の研究室の中を徹底的に家探しをして、犯人としての、のつぴきならぬ証拠物件を手に入れたいものと熱望していた。

かぎをまわす音が検事の胸をえぐった。

気がつくつと、針目博士が研究室のドアの錠^{じょう}をはずし、そこを開いた。そして博士はゆっくりと部屋の中へすがたを消した。検事は全身がかつとあつくなるのおぼえた。取りお

さえるか逃がすか、それはこれからの室内捜査のけっかできまる。

「なぜ、すぐはいらんのだ。しりごみしてどうする」

検事は、入口のところを足をとめてしまった田口巡査を、低い声で叱りつけた。しかし検事は冷汗ひやあせをもよおした。ぐずぐずしている自分の方を、もつときびしく叱りつけたいことに気がついたからである。

田口巡査は、はつとおどろいて、ウサギのようにぴよんとひとはねすると、研究室の中へとびこんだ。とたんにかれは、

「あつ」

という叫び声を発した。

長戸検事の顔は、いつそう青ざめた。そしていそいで部下のあとを追って中へはいった。「うむ」

検事はうなつた。あやうく大きな叫び声が出そうになったのを、一生けんめいに、のどから下へおしこんだ。

かれらはいつたいなにを見たのであろうか。

それはなんともいいいようなない奇妙な光景であった。窓のないこの部屋の四つの壁は、

隣室りんしつにつうずる二つのドアをのぞいたほかは、ぜんぶが横に長い棚たなになっていた。下は床のすこし上からはじまって、上は高い天井のようにまでとどいて、ぜんぶで十段いじようになろう。

そしてこの棚の上に、厚いガラスでできた角かく型がたのガラス槽そうが、一定のあいだを置いてずらりとならんでいるのだったが、その数は、すくなくとも四、五百個はあり、壮観そうかんだつた。

しかもこのガラス槽の中には、それぞれ活発に動いている生物がはいっていた。検事が最初に目をとどめたガラス槽の中には、頭のない大きなガマが、ごそごそはいまわっていた。もつともそのガマは、背中にマツチ箱ぐらいの大きさの、透明な箱を背おっていた。その箱の中には、指さきほどの灰白色のぐにやぐにやしたものがはいっていたが、検事はそこまで観察するよゆうがなく、ただふしぎな頭のない大きなガマがガラス槽の中で、あばれまわっているのにびつくりしたのであった。

検事は、おどろきの目を、つきつぎのガラス槽に走らせた。その結果、かれのおどろきはますますはげしくなるばかりだった。かれはもうひとつのガラス槽の中において、たしかに木製もくせいおもちゃにちがいない人形が、やはり透明な小箱を背おってあるきまわってい

るのを見た。

それはゼンマイ仕掛けの人形とはちがい、どう見ても こんちゅう 昆虫のような生きものに思えた。

つぎのガラス槽の中では、やはり頭のないネズミが、透明の小箱を背おって、人間のよう直立し、のそりのそりと中を散歩しているのを見た。またそのお隣のガラス槽そうの中では、一本足のコマが、ゆるくまわりながら、トカゲのように、あっちへふらふら、こっちへちよろちよると走りまわっているのを見た。なんとという奇怪な生物の展示会場であろう。いや、展示会場ではない、これは針目博士が、他人にのぞかせることをきらっている密室のひとつなのであるから、ごくひ 極秘の生きている ひょうほんしつ 標本室といった方がいいのだろう。

検事はこのふしぎな生きものの世界へとびこんで、あまりの奇怪さに自分の頭がへんになるのをおぼえた。それから後、かれは一言も発しないで銅像のように立ちつづけた。するとその部屋が急に遠くへ離れてしまったような気がした。音さえ、遠くへ行ってしまう。かれは自分が そつと 卒倒の一步手前にあることをさとった。が、どうすることもできなかつた。

博士、怪物を説く

長戸^{ながとけんじ}検事が気がついてみると、かれはいつのまにか長いすによこたわっていた。そばでがやがやと人ごえがする。

「これをお飲みなさい。元気が出ますから」

検事の鼻さきに、ぷーんと強い洋酒のにおいがした。こはく色の液体のはいったコップがかれの目の前につきつけられている。血^{けっしょく}色のいい手がそのコップをにぎっている。

誰だろうかと検事はその声の主をあおいでみるとそれは針目^{はりめ}博士^{はくし}だった。そしてそのまま^ひりに、検事の部下たちの頭がいくつもかさなりあっていた。長戸検事は、びっしよりと冷^ひやあせ汗をかいた。

「いや、もう大丈夫です」

「やせがまんをいわずと、これをお飲みなさい」

「いや、ほんとにもう大丈夫だ」

検事は、強く洋酒のコップをしりぞけて、長いすからきまりわるく立ちあがった。

「だからぼくは、あらかじめご注意をしておいたのです。こんな見なれない動物をごらんになつて、気持が悪くなつたのでしよう」

「いや、そうじゃない。じつは昨夜からかぜをひいて気持がわるかつたのだ。この部屋へはいつたとき、異様なにおいがして、頭がふらふらとしたのだ。心配はいらんです」

検事は強く弁明をした。かれは強引ごういんにうそをついた。このうそを、ほんとうだと自身に信ぜしめたいと願つた。けつして、この奇妙な標本を見て気持がわるくなつたのではないと思ひたかつた。そうでないと、これから先、この奇妙な標本と取つ組んで、事件の真相をしらべあげることとはできなからう。かれは、つらいやせがまんをはつたのである。かれの配下たちの中にも、ふたりばかり脳貧血のうひんけつを起こした者があつた。それはもつともだ。誰だつて、こんな奇妙な標本に向かいあつて五分間もそれを見つめていれば、脳貧血を起こすことはうけあいだ。

脳貧血を起こさない連中の筆頭には、川内警部がいた。かれは顔をまつかにふんげして、激きしている。どなり散らしたいのを、一生けんめいにかまんしているという顔つきで、針目博士の一挙一動からすこしも目をはなさず、ぐつとにらみつけていた。

「針目博士。この動物はなぜここに集めてあるのですか」

長戸検事は職権しよっけんをふたたびふるいはじめた。

「ぼくの研究に必要なからです」

「博士の研究とは、どういう研究ですか」

「そうですね。それはお話しても、とてもあなたがたには理解ができないですね」

針目博士は、回答をつっぱねた。

「理解できるかできないかは問題がいです。説明してください」

「じゃあ申しましょう。これはぼくが本筋の研究にかかるについて、その準備のため作った標本です。つまり本筋の研究そのものじゃないのですよ。いいですね」

と、博士はねんをおして、

「そこでこの標本をごらんになればわかるでしょうが、この動物たちは、自分が持って生まれた脳髓のうずいを持っていないのです。そうでしょう。みんな頭部を斬り取られています。そしてかれらは他の動物の脳髓をもらって、それをかわりに取りつけています。あの透明な小箱の中にあるのは他の動物の脳髓なのです。それを取りつけて、生きているのです。おわかりですか」

「よくわかります」

長戸検事は、反抗するような声で、そういった。ほんとうは、かれには何のことだか、よくのみこめなかつたのだけれども。

「ほう。これがよくおわかりですか。いや、それはけっこうです」

針目博士は、目をまるくした。皮肉でもないらしい。

「これなどは、おもちゃの人形に、ニワトリの脳髓を植えたものですよ。もちろん人形の手足その他へは神経にそうとうする電気回路をはりまわしてありますから、そのニワトリの脳髓の働きによって、この人形は手足を働かすことができますのです。気をつけてごらんなさればわかりますが、この人形の歩きかたや、首のふりかたなどは、ニワトリの動作によく似ているでしょう」

「そのとおりですね」

そう答えた検事の服のそでを、うしろからそつと引いた者がある。そしてつづいて、検事の耳にささやく声があった。それは川内警部であった。

「この標本や博士の研究は、こんどの殺人傷害事件さつじんしょうがいじけんには関係ないようではありませんか。それよりも、早く奥の部屋をしらべたいと思えますが、いかがですか」

そういわれて、検事も警部のいう通りだと思った。そこで一行は奥へ進むこととなった。

大きな引出ひきだし

この部屋から奥へ通ずるドアが二つあった。左手についているのは、物置へ通ずるもので、これはあとで捜査そうさすることとなった。

まっ正面のドアのむこうに、博士の一番よく使うひろい実験室があつた。一行はドアを開いてその部屋へ通つた。

それは十坪ほどあるひろい洋間だつた。

ざつぜんと器械台がならび、その上にいろいろな器械や器具がのつている。まわりの壁は戸棚と本棚とで占領されている。天じようは高く、はじめは白かつた壁であろうが、灰色になつており、大きな裂け目さきめがついている。

まえの部屋もそうであつたが、この部屋にも窓というものがない。天じようの上の古風

なシャンデリアと、四方の壁間にとりつけられた、間接照明灯かんせつしょうめいとうが、影のない明かりを照らしている。

「この部屋は、何のためにあるのですか」

検事が針目博士に質問した。ここには、まえの部屋で見たような、奇怪な標本が目につらないので、検事はいささか元気をもりかえしたかたちであった。

「ごらんになるとおり、ぼくが実験に使う部屋です」

「どういう実験をしますか」

「どういう実験とって——」

と博士は笑いだした。

「いろんな実験です。数百種も、数千種も、いろいろな実験をこの部屋ですることができません。みんな述べきれません」

「その一つ二つをいつてみてください」

検事はあいかわらずがんばる。

「そうですね。細胞の電氣的反応をしらべる実験を、このへんにある装置をつかってやります。もうひとつですね。ここにあるのは生命をもった頭脳から放射される一種の電磁波

を検出する装置です。ことに、劣等な生物のそれに対する装置です。ことに、劣等な生物のそれに対して検出しやすいように、組み立てたものであります。これぐらいにしておきましょう。おわかりになりましたか」

「今のところ、それだけうかがえばよろしいです。それでは室内をいちおう捜査しますから、さようにご承知ねがいたい」

「職権をもつてなさるのですから、とめることはしません。しかしたくさんの精密器械があるのですから、そういうものには手をつけないでください。万一手をつける場合は、ぼくを呼んでください。いっしょに手を貸して、こわさないようにごらんに入れますから」

「参考として、聞いておきます」

「参考として聞いておく？ ふん、あなたがたに警告しておきますが、この部屋の精密器械に対して、ぼくの立ち合いなしに動かして、もしもそれをこわしたときには、ぼくは承知しませんよ。場合によつて、あなたがたをこの部屋から一步も外に出さないかもしれないかもしれませんぞ」

針目博士は、にわかになきげんとなつて、きびしい反抗の態度をしめした。そしてかれは、すみにすえてある大机の向うへ行つて、どこかこわれているらしい回転いすの上に、

大きな音をたてて腰をかけた。そして夕力のような目つきになって、検事たちの方へ気をくばった。

検事は、こんな場合にはよくなれているので、相手がかんかんになればなるほどこつちは落ちつきを深めていった。そして部下たちに、この部屋をじゆうぶん^{じゆうぶん}に搜索し、れいの事件に関係ありと思われる証拠物件があつたら、さつそく^{さつそく}検事を呼ぶようにと命令した。

それから捜査がはじまつた。一同は、これまであつかいなれない器械器具るいだけに、どうしらべてよいのやら、こまつているようであつた。しかしこころえ顔^{ひきだし}の係官たちは、床の上にはらばいになつて器械台の下をのぞきこんだり、戸棚の引出^{ひきだし}をぬきだしたりして、どんどん仕事を進めていった。

だが、思うようなものはすぐには見つからなかつた。

この部屋の、博士がいま腰をおろしているのと、ちようど対角線上^{すみ}の隅にあたるところに、一部に黒いカーテンがおりていた。それを開いて中へ入った川内警部は、そこにもやはり大きな引出が、三段十二個になつてならんでいるのを発見した。その引出は、そうとう大きかつた。しかしかぎもかかつていなかつた。引出にはそれぞれ番号札がついていた。警部が、その引出のひとつに手をかけたとき、誰も気がつかなかつたが、針目博士の口

のあたりには、あやしいうす笑いがかんだのであった。もちろん川内警部は、それ気がつくはずもなく、引出のとつてに力をいれて、ぐっと引きだした。

「おや、これは何だ！」

警部は、すつとんきような声をあげた。彼の顔からすつかり血の気が引いてしまった。

見よ、その半びらきになった引出の中には、黄いろくなつた人間の足が二本ならんでいた、いや、足だけではない。裸体らたいのままの死骸しがいがそこにはいつているにちがひなかつた。

事件はいよいよ奇怪な段階に突入した。いったいこれは何者の死体なのであろう。針目博士の身辺にいよいよ疑問の影がこい。

警部じれる

「おう、ここにも死骸しがいがかくしてある」

警部のそばにいた若い巡査が、おどろきの声をあげた。

針目博士は、しらぬ顔をして、回転いすに腰をかけている。

警部は、その死骸いりの大きな引出をひっぱり出した。消毒薬くさいキャンバスにおおわれて若い男の死体がいっていた。しかしその男の頭蓋骨は切りとられていて、その中にあるはずの脳髓もなく、中からはらっぱであった。

警部は、この死体が、学術研究の死体であることに気がついた。

ねんのために、おなじような他の引出をかたっぱしからひっぱり出してみた。するとほかに、男の死体一つ、女の死体が二つ、はいっていることがわかった。

「この死体は、どうして手にいれましたか」

川内警部は、やつぱりそのことを針目博士にたずねた。

「研究用に買い入れたんです。証書もあるが見ますか」

「ええ、見せていただきましょう」

警部はけつきよくその死体したいゆずりわたししょ譲渡書しよが、正しい手つづきをふんであることをたしかめた。

死体がこの部屋に四つある。そのうえに、もう一つなまなましい死体を、博士はほしく思ったのであろうか。

警部は、針目博士がいよいよゆだんのならない人物に見えてきた。このうえは、こんどの事件に直接関係のある証拠をさがしだして、なにがなんでも博士を拘引こういんしたいと思っ
た。

「針目さん。あなたのお使いになつてゐる部屋は、まだありますか」

長戸検事が、タバコのすいがらを指さきでもみ消して、博士にたずねた。

「あとは、第二研究室と倉庫と寢室の三つです。やっぱり見るとおっしゃるんでしょう」

「そうです、見せていただきますよ」

「どうしても見るんですか」

博士の顔がくるしそうにまがった。

「見せろというなら見せますが、あなたがたがこの室や標本室でやったように、室内の物品むだんに無断で手をつけるのは困るのです。じつは第二研究室では、ぼくでさえ、非常に注意して、足音をしのび、せきばらいをつつしみ、はく呼吸いきもこころしているのです」

「それはなぜです。なぜ、そんなことをする必要があるのでですか」

長戸検事が、口をはさんだ。

すると博士は、吐息といきとともに、遠いところをながめるような目つきになつて、

「おそらく今、世界でいちばん貴重きちような物が、そこに生まれようとしているのです。莊そうご嚴げんと神秘しんぴとにつつまれたその部屋です。あなたがたは、もしその莊嚴神秘の中にひたつている主あるじを、すこしでも、みだすようなことがあれば、あなたがたはとりもなおさず、地球文明の破壊者はかいしや、ゆるすべからざる敵でありますぞ」

それを聞いていた川内警部は、口のあたりをあなたどりの笑えみにゆがめて、
(ふん、邪宗じゃしゆうきよう教の連中が、いつも使うおどかしの一手だ、なにが神秘しんぴだ。わらわせ
る)

と、心の中でけいべつした。

「なんです、生まれ出ようとしている莊嚴神秘のあるじというのは……」

検事は、顔をしかめて、博士を追う。

「生命と思考力をもった特別の細胞が、人間の手につくられようとしているのだ。もしこれに成功すれば、人間は神の子を作ることができる」

博士は、わけのわからないことをつぶやく。

「カエルの脳髓のうずいを切りとって、それを他の動物にうつしうえることですか」

検事は、一世一代の生命科学の質問をこころみる。

「そんなことはいぜんから行われている。ぼくが研究していることは、すでに存在する生命を、他のものに移し植えることではない。生命を新しくこしらえることだ。生命の創造だ。細胞の分裂による生命の誕生とはちがうのだ。それは神が、神の子をつくりたもうのだ。それではない、この場合は、人間の意志のもと、人間の設計によって、新しい生命を創造するのだ。ローマの詩人科学者ルリレチウスの予言したことは、二千年を経たいま、わが手によって実現されるのだ。自然科学の革命、世界宗教の頓挫、人間のにぎる力のおどろくべき拡大……」

川内警部は、にがり切って長戸検事のそでをひいた。

「検事さん、あれは気が変ですよ。ちんぷんかんぷんのねごとはやめさせて、となりの部屋部屋を、どんどん洗ってみようじゃありませんか。さもないと、この事件はさっぱり片づきませんよ。迷宮入りめいきゆういりはもういやですからね」

そういわれて、長戸検事も警部の意見にしたがう気になった。さっぱりわけのわからない博士のうわごに、頭痛のするのをこらえているのは、ばかな話だと思った。

検事は、つぎの部屋を見るから案内するようにと、博士にいった。博士は、いすからのそりと立ち上がった。

どんな光景が、つぎの部屋に待っていることか。

さんじゆう
三重のドア

第二研究室へはいりこむのは、たいへんめんどうであつた。

ドアだけでも、三重になつていた。

しかもそのドアは、どういう必要があつてかわからないが、大銀行の地下大金庫のドアのように、厚さが一メートル近くあるものさえあつた。第三のドアが、いちばんすごかつた。

それをあけると、がらんとした部屋が見えた。水銀灯すいぎんとうのような白びかりが、夜明け前ほどのうす明かるさで、室内を照らしつけていた。

博士は、らんらんとかがやく眼をもつて、係官たちの方をふりかえつた。そして、自分のくちびるに、ひとさし指をたてた。それからその指で、自分の両足をさした。いよいよ

室内へはいるが、無言むごんでいること、足音をたてないことを、もういちど係官たちにもめたのであった。

それから博士は、足をそつとあげて、室内へはいった。

長戸検事も、それにならつて、しずかに足をふみいれた。

川内警部は、ことごとに、鼻をならしたり、舌打ちしたうをしたりして、針目博士はりめはくしに反抗の色をしめしていたが、第二研究室にはいるときだけは、検事にならつて、しずかにはいった。

そのあとに、三人の部下がはいった。

はいつてみると、この部屋は天じようがふつうの部屋の倍ほど高く、ひろさは三十坪ばかりであった。がらんとした部屋と思つたが、それは入口の附近の壁を見ただけのこと、それはいちめんに蠟色ろういろに塗られて、なにもなかった。

左を向いて、奥正面と、右の壁とが、陳列室よりも、もっとひろい棚たながあり、まえにドアつきの四角い陳列棚ちんれつたなが、それぞれ小さい番号札をつけて、整然とならんでいた。壁のいちめんに、百個ぐらいの棚がある。

左の壁は、電気装置のパネルが、ところせましとばかりはめこんであり、背の高い腰かけが一つおいてある。

部屋のまん中に、箱がたのテーブルがひとつおいてある。そしてその上に、ガラスでつくった標本入れの箱が一つのついている。

これだけの、べつに目をうばうほどの品物も見あたらない部屋だったが、気味のわるいのは、この部屋の赤や黄を欠く照明と防音装置だった。それにあとで検事たちも気がついたことだが、気圧がかなり低かった、係官のなかには、鼓膜がへんになって、頭を振っている者もあった。

博士は、係官を手まねきして、陳列棚の前を「いちじゆん巡した。

陳列棚のうちそのドアが開かれて、壁の中におし入れてあるものは、ガラス容器が見られた。検事や警部は、前へ進んで、一生けんめいにその中をのぞきこんだ。

ふたりは、目を見あわせた。

ガラス箱の中には、下の方にかたまったゼラチンのようなものが、三センチほどの厚さで平らな面を作っており、その上に、つやのある毛よりも細い金属線らしいものがひとつかみほど、のせてあった。

(何でしようか)

(何だかわからないねえ)

警部と検事とは、目だけでそんなことをかたりあつた。

それに類するものが、他のガラス箱の中でも見られた。

警部は検事に耳うちをした。それから警部は針目博士を手まねいた。

「これは何ですか。説明を求めます」

警部が声を出したので——その声はかれ、川内警部にしては低い声だったが、針目博士の顔色をかえさせた。博士はあわてて警部を戸口に近いところへひっぱって行き、

「こまるですなあ、そう大きな声を出しては……」

「職しよっけん権こうしを行使しているのに対し、きみはそれをとやかくいう権利はない」

「こまった人だ。あとで後悔しても追っつかんのですぞ」

と博士は悲しげにまばたいて、

「これらのものが何であるかは、さつきもちよつといいかけましたが、あとで隣の部屋で申しあげます」

「いや、いまいいたまえ、あとではごまかされる」

そういつているとき、検事もふたりのそばへ歩みよつた。

「この部屋には、よほど大切な試験材料が置いてあるらしいね」

「試験材料というよりも、わたしが全霊全力をうちこんで作った試作生物なんです」
「あの針金の屑みたいなものは何ですか。あの中に、その生物がかくれているんですか」
「そうではないのです……。いくどもお願いしますが、説明はあとで隣室ですることでおゆるしてください。もしもかれらをくるわせて、悪魔のところへやるようなことがあつたら、まったく天下の一大事ですからね」

警部が検事のわきばらをついた。やはりこの博士は気が変だよというつもりだった。警部の顔に、決心の色が見えた。かれは、いつもの大きな声になつて、博士にいった。

「陳列棚に戸のしまつている棚がたくさんある。あれもいちいち開いて見せなさい」

博士のおどろきは絶頂にたつした。かれはふるえる自分の指をくちびるに立てた。そしてあきらめたというようすで、ふたりをさしまねいた。

博士のうしろに勝ちほこつた川内警部と、いよいよむずかしい顔の長戸検事がついていく。

おそろしい異変

針目博士は、陳列棚ちんれつだなの前に立って、戸のしまっている棚をひ一ふ二ウ三イと八つかぞえた。その小さい戸の上には、骸骨がいこつのしるしと、それから一、二、三の番号とが書きつけてあった。

博士は、用心ぶかく「骸骨の一」の戸を、しずかに手前へ引いた。

中には、おなじようなガラス器があり、その中に見られたものは、よく見ないとわからないほどの細い針金でもって、だ円形えんけいのかごのような形を、あみあげたものだった。

検事にも警部にも、それはすこしも、おどろきをあたえないものだった。

「骸骨の二」の戸を開くと、そこにもやはり細い針金ぎいくのかごのようなものがあつた。これは三稜さんりょうの柱はしらのようであつた。

川内警部は、早くもその前を通りすぎて、つぎなる戸の前へ行つたが、長戸検事はその前に足をとどめて、首を横にかしげた。彼はその三角形の柱が、なんだか背のびをしたように感じたからである。

「骸骨の三」には、やはり針金で、クラゲのような形をしたものがはいつていた。警部は

いよいよがまんがならないというふうには、鼻をならした。博士がおどろいて、警部の方をふりかえり、嘆願たんがんするようにおがんだ。それから「骸骨の四」の戸のまえへ進んで、それを開いた。

とたんに博士の顔が、大きなおどろきのためにゆがんだ。博士がいの者にはわからないことだったが、「骸骨の四」のガラス箱の中はからっぽだったのである。

博士は顔色をかえたまま、係官をつきのけるようにして、左側の壁にはめこんである配電盤の前につけた。そしてほうぼうのスイッチを入れたり、計器の針の動きをにらんだり、ブラウン管の緑色の光りの点の位置を、目盛りで読んだりした。

「針目さん。なにか起こったのですか」

検事が博士のそばへ寄って、低い声でいった。

「大切にしていたものが、なくなりました。いったいどうしたのか、わけがわからない……」

すると川内警部がやってきて、博士の腕をむずとつかんだ。

「きみ、ごまかそうとしたって、そうはいかないよ。あと骸骨がいこつの戸とは五、六、七、八と四つあるじゃないか。早く開いて見せなさい」

「あ、そんな大きな声を出しては——」

「これはわしの地声だ。じこえどんなでかい声を出そうと、きみからさしはずはうけない」

警部がどなるたびに、配電盤の計器の針がはげしく左右にゆれた。

そのときだった。室内にいた者はきゆうにひどい頭痛ずつうにみまわれた。誰もかれも、ひたいに手をあてて顔をしかめた。

それと同時に、骸骨のしるしのつけてあった陳列棚から、すーつと黒い煙が立ちのぼった。しかし「骸骨の四」のところからは出なかった。

「もう、いけない。危険だ。みなさん、外へ出てください」

博士が叫んで、さつき一同のはいつて来た戸口の方をゆびさした。しかしその戸は、しつかりしまっていた。

「どうしたんです、針目博士」

検事がおどろいてたずねた。

「もうおそいのです。警部さんが、この部屋にねむっていた大切なものの目をさましてしまった。えらいことが持ちあがるでしょう。早くその戸口から逃げてください」

そういう間も博士は、まん中にすえてあったテーブルの横戸よこどを開き、その中から潜水夫

のかぶとのようなものを引つ張り出して、すっぽりとかぶった。それから両手に、大げさに見えるゴムの手袋をはめ、同じくテーパーの横からたいこに大きなラツパをとりつけたようなものをつかみ出し、たいこの皮のようなどを棒で力いっぱいたたきつづけた。しかしそれは音がしなかった。そのかわり、ラツパのような口からは、銀白色の粉が噴火する火山灰のようにふきだし、陳列棚の方からのびてくるきみのわるい黒い煙をつみはじめた。

黒い煙は、いったん銀白色の膜につつまれたが、まもなくそれを破つて、あらしの黒雲のように——いや、まっくろな竜のように天じょうをなめながら、のたくりまわった。このとき頭痛が一段とひどくなつて、もう誰も立つていられなかった。いや、例外がある。針目博士だけは、足をぶるぶるふるわせながらも立つていた。

「でよう。この部屋からでよう」

長戸検事が叫んだ。すると川内警部ははつていつて戸口を押しした。戸口はびくともしなかつた。

それを博士が見たものと見え、とぶようにかけて来て、ハンドルをまわして戸をあけると、五人はあらそうようにして、外へとび出した。

五人の係官が出てしまうと、戸はもとのようにしまった。博士がしめたのである。

検事たちは、まだ二つのドアを開かねばならなかった。文字どおり必死で、ようやくドアを開いて、第一研究室へ出ることができた。一同の足は、そこでもとまらなかつた。あきれ顔の人たちや他の警官の顔をすりぬけて、一同は庭へころげ出た。

そしてほっと一息ついたおりしも、天地もくずれるような音がして、目の前にものすごい火柱ひばしらが立った。第二研究室が、大爆発を起こしたのだった。なにゆえの爆発ぞ。針目博士はどうしたであろうか。

事件 迷宮めいきゆうに入る

第二研究室の爆発のあと、針目博士のすがたを見た者がいない。

爆発による被害は、さいわいにも第二研究室だけですんだ。それはまわりの壁が、ひじようにつよかつたせいで、爆発と同時に、すべてのものは弱い屋根をうちぬいて、高く天て

空へ吹きあげられ、となりの部屋へは、害がおよばなかったわけだ。

焼跡は一週間もかかって、いろいろな念入りにしらべられた。

だが、この室内にあったものは、すべてもとの形をとどめず、灰みたいなものと化していた。よほどすごい爆発を起こし、圧力も熱もかなり出たらしい。なにしろ鋼鉄の棒ひとつ残っていないありさまだった。

捜査は、とくに針目博士の安否に重点をおいておこなわれたが、前にのべたように博士のすがたは発見できなかった。また人骨の一片すら見あたらなかった。

もしや博士は地下室へでものがれたのではないかと、焼跡を残りなく二メートルばかり掘ってみたが、出てくるものは灰と土ばかりで、なんの手がかりもなかった。

「どうもこのようすでは、博士は爆発とともにガス体となり、屋根をぬけて空中へふきあげられちまったんじゃないかね」

川内警部は、おしいところで重大容疑者に逃げられてしまったという顔で、こういつた。

長戸検事はしよんぼりと立ちあがった。

「みんな引揚げることにしよう。もうわれわれの力にはおよばない」

これをもつて、お三根殺害事件をはじめ二つの怪傷害事件も、いまはまったく迷宮入りとなつてしまつた。

だが、事件捜査は、ほんとに終つてしまつたわけではなかつた。

その筋では、どういう考えがあつたものか、この事件の捜査をこれまでどおり檢察当局の手でつづけるとともに、それと平行して、私立探偵の蜂矢十六に捜査を依頼したのであつた。

私立探偵蜂矢十六！

この若い探偵について、一般に知る人はすくない。しかし檢察係官の中には、蜂矢十六を認めている人が、かなりある。かれの特長は、科学技術と取り組んでおそれないこと、かんがするどいこと、推理力にすぐれていること、それから、ひとたび獲物の匂いをかいだら、りようけん 獵犬のように、どこまでも追いかけて、追いつめることなどであつた。

だがかれにも欠点はあつた。それはまず第一に年が若いために、古いものにあうとごまかされやすいこと、どんどん走りすぎて足もとに注意しないために、溝へおつちるようなことがあること、すこしあわてん坊であること、それからタバコをすいすぎることなどであつた。かれはひとりの少年を助手にもつていた。それは小杉二郎という、ことし十四

歳になる天才探偵^{てんさいたんでいじ}であった、この少年がいるために、蜂矢はずいぶんあぶない羽目から助かったり、難事件をとくカギをひろってもらったりしている。

しかし蜂矢探偵は、めったにこの少年とともに外をあるかない。ふたりはたいていべつべつにわかれて仕事をする。これは蜂矢探偵の考えによるもので、べつべつにはなれていたほうが、おたがいの危険のときに助けあうこともできるし、また事件の対象を両方からながめるから、ひとりで見るときよりも、正しく観察することができるというのであった。これはなかなかいい考えであった。

さて蜂矢十六は、この事件のこれまでのあらましを、長戸検事の部屋で、検事からひと通り聞いた。検事は人格の高い人であったから、自分たちの失敗やら、とくことのできなかったことを、つつまずにすべて蜂矢につたえた。そしてそのあとで、なにか蜂矢のほうで質問があれば、それに答えるといった。

それに対して蜂矢はつぎのことを聞いた。

「第二研究室の爆発が起こるまえ、針目博士が皆さんを案内して、その部屋にはいったときのことですがね、博士の態度に、なにか変わったことはありませんでしたか」

「さあ、かくべつ変わったということも——いや、ひとつあったよ」

と検事はぼんと手のひらをたたき、

「すっかりわすれていたが、いま思いだした。それはね、あの第二研究室にはいると、博士はきゆうにおとなしくなつたんだ。その前までは博士は気が変ではないかと思つたほど、ごう慢まんな態度でわたしを叱しかりつけ、悪くいい、からみついてきた。しかるにあの第二研究室へはいると同時に、博士はまるで別人のように、おとなしい人物になつてしまつたのだ」

「ふーむ、それは興味ぶかいお話ですね。しかしどういうわけで、そんなに態度がいっぺん一変したのでしょうか」

「それはわたしにはとけない謎だ」

「あなたはあの部屋へはいると、きゆうにはげしい頭痛におそわれたのでしたね」

「部屋へはいつてすぐではなかつた。すこしたつてからだ。五分もしてからだと思う。それにさつきもいったように、この頭痛はわたしだけでなく、あとからきくと他の同僚たちも、みんなおなじように頭痛におそわれたそうさ。これと博士の態度とに、なにか関係があるのかな。いや、それほどにも思われないが……」

「そのとき博士のほうはどうだつたでしょう。やつぱり頭痛になやんでいたようすでしたか」

「ちよつと待ちたまえ」

と検事は腕ぐみをしたが、まもなく首を左右にふつて、

「いや、針目博士は頭痛になやんでいるような顔ではなかったね」

「それはどうもおかしいですね」

このちよつとしたことがらが、後になってこの事件解決のかぎになろうとは、気のつかないふたりだった。

大学生、あまたに雨谷君

せつかく蜂矢探偵の登場を、みなさんにお知らせしたが、ここで蜂矢探偵のことをはなれて、べつの事件についてお話しなくてはならない。それというのが、まことに前代ぜんだい未聞の珍妙なる事件がふつてわいたのである。

東京も、中心をはなれた都の西北早稲田わせだの森、その森からまだずっと郊外へいったところ

ろに、新井薬師あらいやくしというお寺がある。そこはむかしから目の病めやまいに、靈驗れいけんあらたかだとい
 いいつたえがあつて、そういう人たちのおまいりがたえない。

しかし筆者は、いまここにお薬師やくしさまの靈驗をかたろうとするものではなく、そのお薬
 師さまの裏のほうにある如來莊にょらいそうという、あまりきれいでないアパートの一室に、自炊じすいせ
 生活いかつをしている雨谷金成君あまたにかねなりを紹介したのである。

雨谷君は大学生であつた。

だがその時代は、学生生活はたいへん苦しいときであつたうえに、雨谷君の実家は大
 水ずのために家屋かおくを家財かさいごと流され、ほとんど、無むいちぶつ一物にひとしいあわれな状態になつ
 ていた。しかしかれの両親とひとりの兄は、この不幸の中から立ちあがつて、復興ふっこうのく
 わをふるいはじめた。二男の雨谷金成君も、今は学業をおもい切り、故郷にかえつて、と
 もにくわをふろうと思つて家にもどつたところ、

「金成かねなりや、おまえは勉強をつづけたがいいぞ。そのかわりいままでみたいに学資や生活
 費をじゅうぶん送れないから、苦学くがくでもしてつづけたらどうじゃ」

と皆からいわれ、それではというので、その気になつてまた東京へひきかえした金成君
 だつた。

金成君は、それから友人たちにもきいて歩いたけつか、にぎやかな新宿へ出、鋪道ほじょうのはしに小さな台を立て、そのうえに、台からはみだしそうな、長さ二尺の計算尺を一本よこたえ、それからピンポンのバットぐらいもある大きな虫めがねを一個おき、その横に赤い皮表紙の「エジプト古墳こふん小辞典」という洋書を一冊ならべ、四角い看板灯かんばんとうには、書きも書いたり、

——古代エジプト式手相及び人相鑑定

三角軒ドクトル・ヤ・ポクレあまたにこま雨谷狐馬。なやめる者は来たれ。

クレオパトラの運命もこの靈算術れいさんじゆつによりわり出された。エジプト時代には一回に十五日もかかった觀相かんそうを、本師は最新の微積分びせきぶんけいさんほう計算法をおこない、わずかに三分間にて鑑定す。

見料けんりょう 一回につき金三十円なり。ただしそれ以外の祝儀しゅうぎを出さるるも辞退せず。

敬白。

と大変なことが書いてある。

三角軒ドクトル・ヤ・ポクレの雨谷狐馬とは、いったいなんのことやらわけがわからないが、そこはその新宿しんじゆくという盛り場さかばのことゆえ、わけのわからない人間もかなりたくさん歩いてる。

「エジプト式の占うらないし師なんて、はじめてお目にかかるね。話のたねにちよいとみてもらおう」

などと寄ってくる。

そのおかげで雨谷君は、開店第一日には純所得じゆんしよとくとして金二百八十円をもうけ、二日目には金三百九十円をといううなぎ上りの収入をえた。これが午前中は学校の講義を聞き、午後一時から店を出して夕がた六時ごろまでのかせぎであった。なかなかぼろいもうけだと、かれは気に入った。

雨谷君の商売の話をおもしろく書けばおもしろいのだが、それは本篇の事件にはあまり関係がないので、あまりのべないこととし、関係のあることだけを書きつづるが、三日目にはかれは思い切つて、おなじ露店商ろてんしやうから電気コンロとお釜とお釜のふたとを買つて如によら来莊いそうへもどつた。

かれの考えでは、いままではほかの食堂で露命ろめいをつないでいたのであるが、露店商売をはじめてみると、なかなか時間が惜しくて、店なんかあけていられないし、それにあの商売はとても腹がへるので、食堂で食うよりも自分でめしをたいて食った方が、経済であるという結論をえたので、いよいよ文字どおり自炊生活じすいせいかつをはじめることにしたのである。

その夜八時ごろから、一時間ばかりかかって、とてもやわらかいめしができた。それを茶わんで、じかにしやくつて、こんぶのつくだにをおかずに、

「ああ、うまい、うまい」

と六ばいもたべて満腹した。

満腹まんぷくすると、雨谷君の両方のまぶたがきゆうに重くなり、すみにたたんで積んであった夜具やぐをひきたおすと、よくしきもせず、その中へもぐりこんでしまったのだ。

珍妙ちんみょうなる怪異かいいは、そのあとにはじまったのである。

お釜がとつぜん、ことごと左右にからだをゆすぶったのである。そして、ゆすぶっては休み、休んではゆすぶった。お釜のふたがだんだんずれて、やがて大きな音をたてて下に落ち、茶わんとさらをこわしてしまった。

雨谷君は、その音におどろいたか、ぱつとはね起きたが、お釜の方をちよつと見ただけ

でまたドーンと横に倒れて、ぐうぐうと眠ってしまった。

おおがね
大金もうけの種たね

お釜は、ことごと、ことごと、と左右にからだをゆすぶっている。

お釜の中にネズミがはいっているわけではなかった。またお釜のかげで、ネコがからだを動かしているわけでもなかった。お釜は、ひとりでからだをゆすぶっているのだった。

それは運動力学の法則に反しているように思われた。他からの力がくわえられないで、金属製の釜が動くはずはなかった。

それとも電気力か、磁気じきの力が、そのお釜にはたらいっているのであろうか。いやいや、そんな仕掛けは、この部屋の中に見あたらない。

動くはずはないのに、お釜は実際ことごとからだをゆすぶっている。

動いているのがほんとうであるかぎり、お釜には力がはたらいっているのだと思わなくて

はならない。その力はいつたいどこにはたらいており、そしてその力の源はどこにあるのだろうか。

お釜の持主である大学生雨^{あまたに}谷君は、なんにも知らず、なんにも考えないで、しきりにいびきの音を大きくしているだけだった。

そのうちにお釜は、はじめにおしりをすえていた場所よりも、すこし前の方へ出てきた。そしてあいかわらず、からだを左右にぐらぐらとゆすっている。

それは一時間ばかりかかったが、お釜は壁ぎわから出発して、たたみ一枚を縦^{たて}に旅行し、そして夜具のはしからはみ出している雨谷の足首のそばにまで接近した。そのとき雨谷君は寝がえりをうった。かれの太い足が動きだして、いやというほどお釜にぶつかった。

「あいたッ」

おどろいてかれは目をさまし、ふとんをはねのけて、その場にすわりなおした。そしてしきりに目をぱちぱちして、あたりを見る。

「ありやりや、お釜をひっくりかえしたぞ」

お釜はひっくりかえり、おしりが上に、さかさまになっていた。

「あああ、ごはんがたたみの上へぶちまかれちゃった」

彼はお釜をおこし、その中へ、たたみの上に散らばっているごはんをもどした。そしてそのお釜を持って、壁のところへ行きそこへおこうとして、またびっくり。

「おやおや、茶わんとさらがこわれている。誰がこわしたんだろう。また買いなおすと、三十円ぐらいかかる。たまらないや」

そういいながら、雨谷はお釜をはじめの場所へおき、重いふたをかぶせた。そして寝具をちゃんとしきなおした。まくらもおいた。

「さあ、ねるとするか」

彼は上着のボタンに手をかけた。

そのときであった。がたと音がした。釜のふたが下へすべり落ちたのである。

「おや……」

彼は目をまるくした。ふしぎなことを発見したからである。ふたを落としたお釜が、こことトン、こことトンと左右にからだをふりながら、前へはいだしてくるではないか。

雨谷君はびっくりしたが、彼はもともと勇気があったから、立ちあがってお釜をつかみあげた。そして中を見たり、ひっくりかえしておしりを見たり、こーんとたたいたりして、お釜をしらべた。

異常はなかったし、中に動物がはいっていない。彼はお釜を下においた。

下におかれた釜は、しばらくすると、またかたことと、からだをゆすぶり出した。

「ふーン、ふしぎだなあ」

雨谷はおどろいて天眼鏡てんがんきょうを出すと、動く釜をしげしげながめた。かれはしきりに頭をふった。釜は元気づいてカニのようにたたみの上をはいまわる。

雨谷君は、とつぜん天眼鏡てんがんきょうをひっこめてぼんと膝をうった。

「うふん。これはすばらしい金もうけが見つかったぞ。エジプト手相よりは、ずっともうかるにちがいない。二十世紀の奇蹟今様文福茶釜いまようぶんぷくちやがま——ではない文福釜ぶんぷくがま。……文福釜

では弱い。そうだ文福茶釜二世あらわる。さあいらっしやい。見料は見てからでいいよ、見ないは末代まつだいまでのはじだ。得心とくしんのいくまでゆっくり見て、見料はたった三十円だ。

写真撮影、写生、録音、なにしてもようござんすよ。いらっしやい、いらっしやい、というのはどうだ」

大学生雨谷君は、すっかり香具師やぐしになったつもりである。

さあ、彼の大金もうけの計画は、うまく成功するだろうか。それにしてもふしぎなのはその釜であった。いったいどんな秘密を、この釜が持っているのであろうか。

金属Qの謎

「どうかね。なにか手がかりをつかんだかね」

長戸検事は、役所へたずねてきた蜂矢十六探偵の顔を見ると、目をすばしこく走らせて
そういつた。

「あなたのお気に召さない、例の方面をほじくっているんですがね」

と、蜂矢探偵は検事の机の横においてあるいすに腰をおろして、にやりと笑った。

「ははあ、また『金属Q』の怪談かいだんか。きみも若いくせにおぼけばなしにこるなんて、お
かしいよ。良くいつても、きみがおとぎばなしをひとつ作ったというにすぎない」

検事は、いまいまして、エンピツのおしりで前にひろげてある書類をぼんぼんとた
たく。

金属Qとは？ それは本篇のはじめにご紹介したが、針目博士の日記と研究ノートノートのな

かから蜂矢探偵がひろいあげた謎にみちた物件であった。

金属Q！

それはほんとうに実在するのか。それとも針目博士が頭の中にえがいていた夢にすぎないのかそのどつちか、よくはわからなかった。第一、博士の書き残してあるものを読みあさっても、金属Qなるものがどんなものやら、そしてどんな性質をもっているものやら、そこらがはつきり書いてない。そのうえに、博士の書いてある説明は現代において、普通に知られている理学の範囲をかなりとび出して、解することがむずかしい。正しいのか、まちがっているのか、それさえ判定がつきかねる。

だが、蜂矢十六は、そういうわけのわからないものの中に、自分も共にわからないでころがっているのは、おろかであると思った。じぶんは探偵だ。金属Qの理学に通じ、その論文を完成するのは、世の学者たちにまかせておけばいい。じぶんは身をもって金属Qという、怪しき物件にぶつかり、それを手の中におさえてしまえば、それでいいのであった。そしてそれはいそがねばならない。

そこで蜂矢は、すこぶる大胆に、つぎの仮定を考えた。

一、金属Qという怪物が実在する。

二、金属Qは、人造じんぞうされたものである（針目博士だけが、それを創造そうぞうすることができるとはしない）。

三、金属Qは、生命せいめいと、思考力しこうりょくを持っている。

蜂矢は、この三つの条件をそなえた金属Qが実在すると、かりに信じ、これをレンズと見なし、そのレンズを通してこれまでの怪事件を、見なおしたのであった。そのけっか、長戸検事のところへ出むいて、もう一度おとぎばなしをする必要を感じたのだ。

「検事さんもごらんになった、あの第二研究室の中の棚に並んでいた、へんな試作物しきくぶつのことですね。たしか『骸骨がいこつの一』から『骸骨がいこつの八』までの箱がならんでいたそうです。あの中にあつたへんな試作物こそ、金属Qの兄弟だったんじゃないですかね」

「ふーん」

検事は、天じょうのすみを見あげて、ため息ともうなり声ともつかない声を発した。

——そうだ。たしかにじぶんは「骸骨がいこつの一」とか「骸骨がいこつの二」とか札のついていたものを見物けんぶつした。それは、すこぶるかたんな立体幾何学りつたいきかがくてき的な模型もけいのような形をしていた。大小三つの輪が、からまりあっているような、そしてかごのできそこないみたいにも見えるものがあつた。あれがたしか「骸骨がいこつの一」であつた。

それから、三本の直線の棒が平行にならんでいて、そのあいだに助骨ろっこつのように別のみじかい棒が横にわたっていて、もとの三本の直線の棒をしつかりとささえていた。それが「骸骨の二」であつたと思う。じぶんは、ふしぎに思ったので、よく見て、いまもわすれないでいるのだ。

そのつぎに「骸骨の三」は前の二つのものよりずっと複雑なものだつた。いやにまがりくねつた透明とうめいの糸みたいなものが走っていて、なんだかクラゲのような形をしていた。

さてそのつぎの「骸骨の四」という仕切りの中を、針目博士が開いて、おどろきの目をみはつたのだ。その箱の中には、かんじんの物件ぶつけんがはいっていなかった。

「どうしたのだろう。わけがわからない」

と博士が叫んだ。その直後、さつきからじりじりと焦じれていた川内警部が、火のついたような声で叫んだため、なにかそれが刺しげきとなつたらしく、博士は「危険だ、みなさん外へ出てください」と追い出し、そしてそのあとであの爆発が起つたのだ。してみれば、「骸骨の四」が紛失ふんしつしていたことがひとつの手がかりかもしれない。いま、蜂矢探偵が、あのへんな透明な針金細工はりかねさいくのようなものを、金属Qの兄弟ではないかとうたがっているのも、根拠こんきよのないことでもないと思われる。そこで検事はいった。

「……もし、そうだったら、どうしたというのかね」

「殺人事件の起こるまえに、金属Qだけは、第二研究室から逃げ出していたんです。博士は、それに気がつかないでいた。その金属Qは、お手伝いさんの谷間三根子たにまみねこの部屋にもぐりこんでいた。そして彼女を殺したのです。三根子の両手両腕、肩や胸などに傷がたくさんついています。あれはみな、金属Qとわたりあったときにできた傷だと思っんです。どうですか」

蜂矢は、にやにやと笑った。そのとき検事の方は、さつきとはちがってかたい表情になつていた。だが、黙もくしていた。

殺人者の追跡

「そののちになって、川内警部が足首の上を斬られ、田口巡査はほおを斬られましたね。あれもみな、金属Qのやった第二、第三の事件なんです。これはどうです」

蜂矢探偵は、いよいよ検事のほうへ向きなおって、検事の答えはどうかと、目をすえる。

検事は、目をとじた。そして無言だ。

「そう考えると、針目博士邸はりめはくしていにおける三つの殺人傷害事件さつじんしょうがいじけんも、かんたんに答が出て

しまうのですがねえ。どうです検事さん。このおとぎばなしを採用なさったらどうですか」

検事が、やっと目をあけた。かれは、エンピツのおしりで書類のうえをぴしりとうった。

「だめだ。いくら答がうまく出ようと、仮定のうえに立つ答は、ほんとの答とはいえない。

金属Qがはたして谷間三根子を殺したか、川内君を斬り、田口巡查を斬ったか。そのとこ

ろの証明ができないかぎり、その答を採用するわけにはいかん。まさか検事が全文おとぎ

ばなしの論告はおこなえない」

そうはいったが、検事も「もし犯人が金属Qならば」の仮定において、答がずばりとで

るその明快めいかいさには、心をうごかされているようすであった。

蜂矢はかるくうなずいた。その仮定さえ証明できれば、検事も了解りようかいすると見てとつ

たからである。

「さあ、その仮定が真なりという証明ですが、これは針目博士に会って聞けば、一番はっ

きりするんです。しかし困ったことに針目博士は姿を消してしまった」

「針目は死んだと思うか、それとも生きていると思うか、どっちです」

「みなさんの調査では、針目博士はからだを粉砕ふんさいして、死んだのだらうという結論になつていますね。ぼくもだいたいそれに賛成します」

「だいたい賛成か。すると他の可能性も考えているの」

「これは常識による推理ですが、針目博士はあの部屋の爆発危険ばくはつきけんをかんじて、あなたが隣室りんしつへ退避たいひさせた。そしてじぶんひとり、あの部屋にのこつた。博士のこの落ちつきはらつた態度はどうです。博士はじぶんが助かる自信があつたから、あの部屋にのこつたんです。そう考えることもできませんでしょう」

「それは考えられる。だがあのひどい爆発は、われわれがあの部屋を去るとまもなく起つた。博士が身をさけるつもりなら、なぜそのあとで、われわれのあとを追つて出てこなかつたのであろうか。そうしなかつたことは、博士は爆発から身をさけることができなかつたんだ。それにあの爆発は、じつにすごいものだったからね」

検事は、そのときのことを思い出して、ため息をついた。

「あなたがたから見れば、爆発はたいへんすごいものであり、爆発はアツという間に起つたと思われるでしょう。しかし針目博士はあの部屋のぬしなんだから、そういうことは

まえもって知っていたと思うんです。だから、いよいよわが身に危険がせまったときに、博士は非常用の安全な場所へ、さつとどびこんだ。ただしこれは、あなたがたのあとについて、隣の部屋へのがれることではなかった。つまり、べつに博士は非常用の安全場所を用意してあり、そこへのがれたと考えるのはどうでしょう」

「そういう安全場所のあったことを、焼跡やけあとから発見したのかね」

「いや、それがまだ見つからないのです」

「それじゃあ想像にすぎない。われわれとて、もしやそんな地下道でもあるかと思つてさがしてみたが、みつからなかった」

「わたしは、もつともつとさがしてみるつもりです」

「いくらさがしても見つからなかったらどうする。それまでこの事件を未解決のまま、ほおっておくわけにはゆくまい」

「そうです。博士の安否あんびをたしかめるほかに、他のいろいろな道をも行つてみます。そのひとつとして、わたしは金属Qを追跡ついでせきしているのです」

「え、なんだって、金属Qを追跡しているって。きみは正気しょうきかい」

長戸検事は目をまるくして、蜂矢探偵の顔を見つめた。

「検事さん。わたしはもちろん正気ですよ」

「だってどうして金属Qを追跡することができるんだい。そんなものは、どこにもすがたを見せたことがない」

「さあ、そこですよ。金属Qのすがたを見た者はない。また金属Qのすがたがどんな形をしているか、それを知っている人もないようです。ですが金属Qは、まず第一に谷間三根子を殺害さつがいしました。あの密室をうちやぶつて、中へとびこんだ連中は、室内に金属Qのすがたを発見することはできなかつたが、そのすこしまえに金属Qが電灯のかさにあたつて、かさをこわす音は耳で聞きました。そうでしょう」

蜂矢の話は、事件のすじ道をたしかに前よりもあきらかにしたように思われ、検事も心を動かさずにいられなくなつた。蜂矢はつづける。

「つまり、金属Qは、相当のかたさを持つているが、すがたは見えにくいものである。このように定義ていぎすることができません。このことを裏書するものは、つぎの警部と田口巡査の負傷です」

「あ、なるほど」

「見えない金属Qは、あの室内にとどまっていたんですが、きゆうにふとんのしたかどこ

からかどび出した。そのとき川内警部の足首の上を、スーツと斬った。そして金属Qは室外へとび出したのです。そこは廊下です。廊下を博士の居間いままのある、奥のほうへととんでいく途中、田口巡査のほおを斬った。そうでしょう。こう考えて行けば、われわれは金属Qを追跡していることになる。そう思われませんか」

蜂矢の顔は、真剣だった。

「骸骨がいこつの四」とQと

「なるほど。そう考えると、すじ道がたつ。感心したよ、蜂矢君」

検事はポケットからタバコを出して、火をつけた。

「さあその先です」

と蜂矢はこぶしでじぶんの手のひらをたたいた。

「それから先、金属Qはどこへ行ったかわからない。わかっているのは、あなたがたが、

博士に談判して、倉庫や研究室をおしらべになったことです。それから爆発が起こったというわけです」

「ちよつとまった、蜂矢君。れいの『骸骨の四』ね。第二研究室の箱の中からすがたをけして、針目博士がおどろいたあれだ。あの『骸骨の四』と金属Qとはおなじものだろうか。それとも関係がないものだと思うかね」

検事も、いつの間にか、蜂矢のおとぎばなしに出てくる仮定を、しようしよう利用しないでいられなくなつたらしい。

「ああ、そのことですか。わたしは問題をかんたんにするため、いちおうその『骸骨の四』と金属Qが同一物であつたと仮定します。もしこの仮定がまちがっていたところで、たいたあやまりではないと思います。同一物でないとしても、両者は親類ぐらいの關係にあるものと思います」

「ふーン。そうかね」

「つまりどつちも博士の研究物件なんです。そしてどつちも生命せいめいと思考力しこうりよくを持っているんです。『骸骨の四』は、かつどうりよく活動力を持つています。『骸骨の四』は、金属Qと同一物であるか、そうでないにしても、金属Qは『骸骨の四』から生まれた子か

孫かぐらいのところでしょう。けっして他人ではない」

蜂矢のほおが赤く染まった。かれも、じぶんのたてた推理に興こうふん奮してきたのであろう。「これは気味のわるいことになった」

と検事は、指にはさんだタバコから、灰がぼたりとひぎの上へ落ちるのにも気がつかない。

「われわれは知らないうちに、金属Qと同席していたことになるんだね。これは生命びろいをしたほうかね。いやな気持だ」

「検事さん、これはあなたのお信じにならない、おとぎばなしの仮定のうえに立つ推定なのです。それでも気味が悪いですか」

蜂矢が皮肉ではなく、まじめにたずねた。

「うむ。なんだか知らないが、ぼくはいましたが、とつぜんいやな気持におそわれた。いままでの経験にないことだ。そうだ、これはきみの話し方がじょうずなせいだろう。ぼくはやつぱりおとぎばなしなんか信じることはできないね。はははは」

と検事は笑った。そしてタバコを口へ持っていったが、火は消えていた。

「ところが検事さん。いままでの話は、おとぎばなしや仮定であったかもしれんですが、

ここに新しく、げんぜん 厳然たる怪事実が存在することを発見しました。このものは、考えれば考えるほど、おそろしい正しょうたい体を持つていると思われてくるのです。まさに二十世紀がわれわれに、おきみやげをする奇蹟きせきである。というか、それとも、われわれは実にばかにされていると思うんです」

蜂矢の目が、あやしく光つてきた。

「それは何だい。きみのいつていることはチンプンカンプンで、意味がわかりやしない」「いや、そうとでもいわなければ、その怪事実のあやしき加減かげんをすこしでも匂におわすことができないのです。まあ、それよりは、さつそくこれからご案内しましょう。わたしといっしょに行つてください。そして検事さんはご自分の目でごらんになり、そしてご自分の頭で、その怪事実の奥にひそむ謎をつまみ出してください」

「え、どこへ行つてなにを見ろというのかい」

「今、浅草公園にかかっている『二十世紀の新しんぶん文福茶釜ぶくちやがま』という見世物を見物に行くんです。これは、わたしの助手である小杉こすぎ少年が、わたしに知らせてくれたものです。じつは茶釜じゃなく、めしたき釜の形をしているんですが、それがひよこひよこ動き出し、音楽に合わせておどつたり、綱なわわたりもするんです。しかもインチキではないらしい……」

「インチキにきまつているよ。きみもばかだねえ」

「いや、ところがわたしのしらべたところは、インチキでないのです。わたしは気がついたのです。あの新文福茶釜こそ、金属Qそのものが、茶釜にばけているのかもしれない」

「なに、金属Qだって。よし、すぐ出かけよう。そこへつれていってくれたまえ」

検事は立ちあがって帽子をつかんだ。

観音堂かんのんどううら

すばらしい人気だった。

「二十世紀の文福茶釜は、こちらでござい。これを一度みないでは、二十世紀の人だといえない。これを見ないで、二十世紀の科学文化をかたる資格はない。東京第一の見世物はこれだござい。」

坊っちゃん、お嬢ちゃん、さあ、いらつしやい。学童諸君も大学生諸君も、早く見てお

いたがよろしい。社会科に關係あり、理科に關係あり。

このめずらしい『鉱物』を見おとしては一代の恥はじですよ。さあ、いらっしやい。入場料はびつくりするほどやすい。たった三十円です。こどもさんは大割引のたった十円」

観音堂かんのんどうのうらにあたる空地あきちに、本堂そのけの背の高い大きな小屋がけをし、サーカスそつくりのけばけばしいどんちようやら大看板おおかんばん、それに昔のジンタを拡大したような吹奏楽団すいそうがくだんが、のべつまくなしに、ぶかぶかどんどん。

この大宣伝政策はみんな、かの大学生雨谷金成あまたにかねなり、いや、この興行主こうぎようしゅの雨谷狐馬あまたにこまが、頭の中からひねりだしたものの。

花形大夫はながただゆうの二十世紀文福茶釜がまは、じつは彼が新宿しんじゆくの露天ろてんで、なんの気なしに買った、めしたき釜がまであった。

「どうです、長戸さん、この景気は……」

と、蜂矢探偵は検事の顔を見る。

「いやあ、大したものだね。おそるべき大あたりの興行だ。これじゃ表の観音さまのおかせぎ高よりは多いだろう」

検事は目をぱちくり。

「それじゃ、われわれも場内へはいつてみましよう。二郎君。入場券を買っておくれ、大人二枚に子供一枚。子供というのは、君のぶんだよ」

そういつて蜂矢はポケットから、紙幣きせつをまいたのを出して、その中から七十円をとって、小杉少年にわたした。

少年は、すぐかけていつて券を買つて来た。そこで三人は、すごい人波にもまれながら、小屋の入口から中へはいつた。

三千人あまりの入場者が、ひしめきあつて、舞台の上の怪物の動くあとを、目で追いかけていた。

舞台は、拳闘のリングのように、見物人に四方をかこまれてまん中にあり、いちだん高くなつていた。そして舞台から二本の花道が、楽屋がくやの方へわたされていた。

大学生雨谷あまたには、りっぱな燕尾服えんびふくをつけ、頭髮はとんぼの目玉のように光らせ、それから長い口ひげをぴんと上にはねさせ、あごには三角形のあごひげをはやして、どうやら西洋の悪魔の化身けしんのように見える。

手にはぴかぴか光る銀の棒を持って、二十世紀茶釜にしきりに気あいをかけている。

「いよいよ、これより千番に一番のかねあい、大呼び物の綱わたりとございまする」

美しい女助手が六人、ばらばらとあらわれ、舞台に高く綱をわたす。そのあいだ、問題の怪物は、台の上の、赤いふとんの上にどっしりしりをおちつけ、ごとごととからだをゆすぶっている。

綱は引きはられた。助手たちは、左右へぱつと、花が飛ぶようにわかれると、三角軒狐さんかくけん馬師こましがしずしずと舞台の中央に立ちいでて、口上をのべる。

「いよいよもつて、二十世紀茶釜の綱わたりとございます。ところがこの綱わたりは、あつちにもある、こつちにもあるというかびくさい綱わたりとはちがい、すこぶる奇想きそう天外んがい、大々奇抜だいだいきばつなる綱わたりでございます。それはじつに、ユークリッドの幾何学ちようえつを超越ちようえつし」

と、ここまでいうと、れいの花のような女助手が左右から雨谷のうしろにきて、雨谷のからだに、うらがまっかな大学教授のガウンを着せ、それから雨谷の頭の上に、ふさのついた四角い大学帽をのせる。

「しかして二十世紀の物理学の弱点をつき、大宇宙の奥にひそめられたる謎をば、かつギリシヤの科学詩人——」

「能書が長いぞ」

「早くやれツ。演説を聞きにきたんじやねえや。綱わたりをやらかせ」

「そうだ、そうだ。早く茶釜の綱わたりを見せろ」

「……いや、諸君のご熱望にこたえ、くわしき説明はあとにゆずり、ではさつそく綱わたりをお目にかけます。花形茶釜大夫、いざまずこれへお目どおりを。はーッ」

すると、れいの怪物の釜が、赤いふとんからむくむくと動きだして、ぬつとさしだした雨谷の手の上にひよいと乗る。

そのまま、お客のまえを、釜はあいさつするように、つつーッと通る。

それが一巡りすると、釜は綱のはしへ、ひよいとのせられる。

一本の綱だ。その綱はゆらゆらとゆれている。その上へ、釜がのる。見たところ、はなはだ不安定だ。

だが、怪物の釜は、どんとおしりをおちつけて、落ちはしない。

すごい空中曲芸

「早く綱をわたらせろ」

「足はどうした。茶釜から足がはえないぞ」

「タヌキの首もはえないや」

「さきに説明を打ち切りましたが……」

と雨谷が、ここぞと声をはりあげての口上だ。

「二十世紀の茶釜は、昔の文福茶釜のようなタヌキのばけた動物とはちがいで、純正な『鉋物』でござりまする。その証拠には、お見物のみなさんがたよ、この二十世紀茶釜は足もはえませずタヌキの首もませず、お見かけどおりの、いつわりのない釜でござりまする。それが、あたかも生あるものごとく、綱わたりをいたしますから、ふしぎもふしぎ、まかふしぎ。さあ大夫さん、わたりましようぞ。はーッ」

雨谷の口上に、二十世紀茶釜は、そろそろと綱の上をわたりはじめた。

あれよ、あれよと、見物の衆の拍手大かっさいである。小杉少年も蜂矢探偵も、手をぱちぱちとたたく。ただ長戸検事だけは、こわい目を舞台へ向けて、手をたたくどころか、にこりともしない。

あやしい茶釜は、するすると綱の上を走ってまんなかまで進んだ。そこでぴったりとまった。

「茶釜はひとまず休きゆうけい憩けい、絶ぜつ景けいかな、絶景かな、げに春のながめは一目千金……」
と、釜はまたそろそろと綱をわたりだした。囃はや方かたがおもしろくはやしたてる。

「どうです、長戸さん」

蜂矢は、検事の耳にささやいた。

「なんだかあやしいね。あれは何か仕掛けがあつて綱わたりをしているんだらうね」

「さあ、そこが問題なんです、まあ、もうすこし見ていらつしやい」

釜は、綱を向うのはしまでわたりきると、こんどは引き返した。むぞうさに綱の上をつつと走る。

「さあ、これよりはお目をとめてご一覽、二十世紀茶釜は脱だつ線せんの巻とござい」

雨谷の口上。するとふしぎな釜は綱をふみはずした。あつ、落ちるかと思つたが、落ちもしない。綱をふみはずしたまま、あやしい釜は宙に浮いている。

「つぎなる芸当は、二十世紀茶釜は宙がえり飛行の巻……」

するとあやしい釜は綱のまわりを、くるッくるッとラセン状にまわりだした。なぜ釜が、

そんな宙がえり飛行をするのかわからない。

「このところ糸くり車。これよりいよいよ早くなりましたして急行列車の車輪とごごい」

釜はくるくると、目にもとまらぬ速さでまわりだした。観客は拍手大かつさいである。

「これこれ釜さん。ちよいと見物の衆に拍手のお礼をなされよ」

雨谷がいうと、ものすごい速さでラセン回転をしていたあやしい釜は、ぴたりと舞台の中央に——おお、それは宙づりの形でもって、ぴたりととまり、おじぎをするように見え
た。

またもや見物席よりは拍手のあらしだ。

「ごあいさつすみましたれば、つぎは大呼びもの だいくうちゅうらんぶ 大空中乱舞とごごい。はーッ」

□ こうじょう 上とともに、釜は舞台の上をはなれて、見物席の上へとんでいった。そこでひら
りひらりと、まるでこうもりのように飛びまわるのであった。見物人は、ほうほうとおど
ろきの声を発してあやしい釜のあとを目で追いかける。

「どうです、検事さん」

蜂矢探偵は、長戸のそでをひいた。

「うむ、じつに奇怪きわまる。どうしてあんな空中乱舞ができるのだろうか。あれが仕掛

けによるにしても、それは非常にすぐれた仕掛けであるにそういない」

「ぼくはあれについて、三人の技術者と、二人の科学者の意見をもとめましたが、この五人の専門家の感想はおなじでありました。つまりああいう運動は、今日の科学技術の力では、とてもやらせることができないというんです。この言葉は、ご参考になるでしょう」

「ふーむ。すると、あれは仕掛けあつて動いているのではないという解釈なんだね」

「そうなんです、その五人の専門家の意見というのはね」

「じゃあ、なんの力で動くのか、解釈がつかないではないか。あの釜を動かしている力のみなもとは、いったいなんだ」

「それこそ金属Qですよ」

「金属Q?」

「針目博士が作った金属Qです。生きている金属Qです。生きているから動きもするし、宙がえりもする」

「はっはっはっ。きみは解釈にこまると、みんな金属Qの魔力にしてしまう。いくら原子力時代でも、そんなふしぎな金属Qが存在してたまるものか。またはじまったね。きみのおとぎばなしが」

「長戸さん。あなたはここへきて、さつきからあれほど、金属Qなるものの活動をごろんになっておきながら、まだその本尊ほんぞんを信じようとはせられないのですか」

「あれは一種の妖術ようじゆつだよ」

「では、誰が妖術を使っていると思われるのですか」

「それはあの燕尾服えんびふくの男とその一統いっとうか、あるいは針目博士だ」

「針目博士ですって。あなたは博士がまだこの世に生きていると思っっているんですね」

「いや、確信はない。しかし、もしも針目博士が生きていたら、この種の妖術しゆを使うかも知れないと思うだけだ」

そういつているとき、とつぜん場内がそうぞうしくわきあがった。それは一大椿事いちだいちんじが発生したからだ。その椿事を、蜂矢も長戸も、たがいに論争しながらも、ちゃんと見ていたのである。だからふたりも、他の観客とおなじように「あああッ」と叫んで、席から立ちあがった。

その一大椿事とは何？

いちだい
いちんじ
大椿事とは？

一大椿事というのは、二十世紀茶釜が上から落ちて、小さな破片にわれてしまったことである。

そのすこのしまえ、かのあやしい釜は、見物人の頭の上の飛行をひとまわ一巡りおえて、からだをひねって、ひらりと舞台の上へもどってきた。そしてもういちど綱わたりをはじめたのだ。

見物人たちは、めでたく場内大飛行に成功してもどってきた二十世紀茶釜に拍手をあげせかけた。綱わたりははじまっているが、もう誰も以前のようには、その綱わたりが成功するか失敗するかについて、手に汗をにぎっていないなかった。成功するのは、もうあたりまえといつてよかった。

ところが、その予想が狂ったのである。二十世紀茶釜は、綱のまん中まできたとき、とつぜんすうーつと下に落ちていった。
がちやーン。

金属的なひびきがして、二十世紀茶釜は、舞台のゆかにあたってこわれてしまった。

「やあ、茶釜がこわれた」

「ようよう、芸がこまかいぞ。二十世紀茶釜は、このとおり種もしかけありませんとさ」
「ああ、そうか。わっはっはっはっ」

見物席のわきたつ中に、きもをつぶして、その場にぶつ倒れそうになったのは、興行こうぎょう主うしゆの大学生雨谷あまたにだつた。かれは、こわれた釜のそばへかけより、ひぎを折つて破片はへんをひろいあつめ、むだとは知りつつも、その破片をつぎあわしてみた。

だめだつた。二十世紀茶釜はもとのとおりにならなかつた。かれは落胆らくたんのあまり、場所がらをもわきまえないで、舞台にぶつ倒れて、おいおいと泣きだした。

「おい、あそこにあやしい奴がいる。逃げるつもりらしい。逃がすな」

そういったのは、長戸検事であつた。

かれはさすがに、職掌しよくしやうがら落ちついていて、あのような大椿事だいちんじのときにもあわてないで、ひとりのあやしい人物をみとめたのだ。その人物は、舞台のすぐ前にいて、いす席にはつかず、たつて見物していた。そしてあの事件の起こるすこし前になって、かれは、吊皮つりかわでくびから吊つて小脇にかかえていたカバンぐらいの大ききの黒い箱を胸の前へま

わした。その箱と舞台とをはんぶんのにぞきながら、かれはその箱を手でいじっていた。そのうちに、かれがさつと顔をきんちようさせた。そのせつなに、舞台では二十世紀茶釜が、綱を踏みはずして下に落ちたのであった。

するとその人物は、いっしゆん硬こうちよく直ちよくしていた。快心かいしんのほおえみをもらしたようにも思ったが、なにしろその人物は、茶色の、型のくずれたお釜帽子かまぼうしをまぶかにかぶり、大きな黒めがねをかけ顔の下半分は、黒いひげでおおわれていたので、その表情をはつきりたしかめることができなかつた。

(あやしい奴！)

検事の目が、はりついたようにじぶんの上にあると知ってか知らないでか、その怪人物は席をはなれて、わきたつ見物人たちをかきわけて場外へ出ようというようすだ。そこで長戸検事は、蜂矢探偵に、

「あそこに、あやしい奴がいる。逃がすな」

と声をかけたのであった。

検事が席を立って走りだしたので、蜂矢はかれのあとにしたがわないうけにいかなかつた。だがこのとき蜂矢十六は舞台の方へ、かなりひきつけられていたのである。その心を

あとへ残し、助手の小杉少年にそれツと目くばせをして、わずかのことばを少年の耳にのこすと、蜂矢は検事のあとを追いかけた。

小屋の出口のところで、検事は不良青年ふりようせいねんすうめい数名につかまって、なぐりつこをやっていた。そこへ蜂矢はとびこんで、不良青年たちをあつさりとかたづけた。そして検事を助けて、場外へでた。

「あ、あそこにいる」

怪人物は公園から町の方へ逃げだすところだった。かれはちらりとうしろを見た。

蜂矢は検事とともに全速力で追った。

怪人物は、うしろを見ながら、ひろい道路を馬道うまみちの方へかけていく。かれは老人のように見えるながら、いやに足が早かった。しかし検事は学生るとき短距離の選手だったから、足には自信があつたし、蜂矢は若さで追いつくつもりだった。

怪人物は、馬道の十字路をはすかにわたった。そのとき自動車自動車が怪人物をじやました、だから追うふたりがつづいて、その十字路をよぎったときには、わずかに距離を十メートルほどにちぢめていた。もうすこしだ。

がちやーン。

怪人物は小脇にかかえていた黒い箱を歩道の上におとした。

「あッ、それを拾^{ひろ}わせるな」

検事が叫んで、黒い箱の方へとびついた。蜂矢もその黒い箱にちよつと注意をうつした。それが怪人物にとつては、絶好の機会だった。二人が顔をあげて、怪人物の方をみたとき、怪人物のすがたはもうなかった。

怪人物は、かきけすようにすがたを消してしまつたのである。異^い様^{よう}な黒い箱だけが、ふたりの手にのこつた。

黒^{くろ}箱^{ばこ}の謎

「うーん、ざんねん。うまく逃げられてしまつたわい」

長戸検事は、大通りのヤナギのかげで汗をふきながら、そういった。とり逃がした怪人物をあきらめたようなことをいいながらも、まだかれの目は往^お来^うへいそがしく動いてい

た。

「きようは逃がしても、そのうちにきつとつかまりますよ」

蜂矢探偵が、検事をなぐさめた。

「そうだ。とにかく、彼奴あいつはこのへんですがたを消したんだから、どこかこの近くに巣すくっているのにちがいない。ああ、そうだ。怪人物がおとしていった黒箱を、ちよつとしらべてみよう。こつちへだしたまえ」

その黒箱は、さつきから蜂矢が検事からあずかって、こわきに抱いていたのだ。それは木の箱だった。しかしかなり重いところを見ると、中に金属製の何物かがはいっているにちがいない。

「どこかあくんだろうが、どうしたらいいだろうかね」

検事は、こういうことになる、いつも手をやく方であった。そこで蜂矢のたすけをもとめる。

「さあ、どこがあくんですかな」

蜂矢もその場にしゃがんで、黒箱をいろいろといじってみる。なかなかあかなかつたけれど、蜂矢がその黒箱の板の節ふしあな穴に小指を入れてみたときに、きゆうに箱がばたんとは

ねかえり、四方の枚がはずれた。そして中から出てきたものは、銀色のうつくしい金属光こ沢うたくをもった箱であった。

「二重箱にじゅうばこになつてゐるんですね。なかなか用心ぶかい作りかただ」

蜂矢は、おどろいていった。

「なるほど。そしてこれは何かの器械らしいが、いったいなんの器械かね。なんに使う器械かね」

「さあ。待つてくださいよ」

蜂矢は、ポケットからドライバーを出して器械の裏蓋うらぶたをあけた。中を見ると、ラジオ受信機に似た、こまかい部品器具が集まつており、赤や青や黄のエンパイヤ・クロスのさやをかぶつた電線が、くもの巣のように配線してあつた。

「電波を出す器械のようですね。いわゆる送信機でんぱちようの一種らしいのですが、かんじんの真空管がぬいてあるし、電波長でんぱちようを決定する、同調回路どうちようかいろのところもねじ切つてあるから、はつきりわかりませんねえ」

蜂矢は、いよいよおどろきの色を見せてそういった。

「なんだって、かんじんの真空管やら、何やらがぬいてあるというのかい。誰がそんなこ

とをしたのだろう。やっぱり、あのあやしい男のしわざか」

検事は自問自答した。

「そうでしょうね。あの怪人物は、なかなか注意ぶかくやっていますね。ただのネズミじやありませんね」

「そうだ。こうなると、こんな黒箱なんか目をくれないで、彼奴あいつをおいつめた方がよかつたんだ。そして、みんな彼奴の註文ちゅうもんに、こつちがはまったことになる。まったくわれながらだらしがないわい」

検事は、苦笑してくやしがつた。

「とにかくこの黒箱は持つてかえつて、なおよくしらべてみましょう。時間をたつぷりかけてしらべると、もつとはつきりしたこの器械の性質なり使いみちなりがわかるかもしれません」

「そうしてくれたまえ」

そこでふたりは、ヤナギの木かげから腰をあげた。

「検事さんは、これからどうしますか」

「もう一度、二十世紀茶釜の小屋のようすを見てから、役所へもどることにしよう」

「では、おともしましょう」

ふたりは、道をひきかえして、浅草公園のうらから中へはいった。さつきまで大にぎわいだった小屋のあたりには、もう人影もまばらだった。

小屋のまえに立つてみると、あの景気のよい呼びこみの声もなく、にぎやかすぎるほどの楽隊の楽士たちも、どこへ行ったかすがたがなく、表の札売場ふだうりばはびったりと閉じられ、「都合により本日休業」のほり紙が四、五枚はりつけられ、そよかぜにひらひらしていた。ふたりは、小屋の中へはいつてみた。

なかには、もちろん見物人はただのひとりも残ってはいず、この小屋の雑用ざつようをしているらしい老人が四、五名、のんきそうに舞台の上でタバコをすい、茶をのんでいるだけだった。

「おいきみ、興行主こうぎょうしゅの雨谷君あまたには、どこにいるのかね」

検事が、そういつて、たずねた。

その筋すじの人だということは、老人たちにもすぐぴんときたらしく、かれらはぺこぺこと頭をさげて、

「へい、だんな。雨谷さんは、さつきしんだいじどうしゃ寝台自動車しんだいじどうしゃにのせられて、なんとか病院へ行きま

したがね」

「どこか、からだの工合がわるいのかね」

「へい。なんですか、心臓が悪いとか、アクマがどうしたとかいってましたがね、あつしはよくみませんので。へへへへ」

茶釜ちやがま小屋こやの 終幕しゆうまく

その夜、小杉二郎少年が蜂矢のところをたずねてきたので、ひるま茶釜破壊の椿事ちんじがあつてからあとの、小屋のなかのようすがだいたいわかった。

「あの雨谷あまたにという茶釜ちやがま使いの人は、たしかに気がへんになったようですよ。はじめは舞台の上にうつぶして、わあわあ泣いていたんですが、しばらくすると、むっくり起きあがりましてね、歌をうたい出したんです。それから踊るようなかっこうをしながら、綱わたりをはじめたんです。文福茶釜にかわつて、じぶんが綱わたりを見せようというのです。

見物人は、わつとかつさいしました」

「ふーん。それはかわつているね」

「ところが、とつぜん雨谷はおこりだしましてね、見物人をにらみつけて、さかんに悪口をとばすのです。見物人たちの方では、これをおもしろがって、わあわあとさわぎたてる。すると雨谷はますます怒って、ゴリラのように歯をむきだし、どんと舞台をふみならし、たいへんな興奮です。あげくのはてに、足もとに落ちていた文福茶釜の破片を拾いあげて、これを見物人席へ投げはじめたからたいへんです」

「ほうほう。それはたいへんだ。見物人はけがをしやしなかつたかい」

「けがをしました。だから見物人の方が、こんどはほんとうに怒ってしまいましたね、こんどあべこべに見物人の席から、茶釜の破片はへんを舞台へ向かって投げかえす。すると雨谷の方でも、それに負けていずに投げかえす。しまいには、茶釜の破片だけでなく、棒ぎれや電球や本や弁当箱までが、見物人席と舞台の間にとびかうさわぎです」

「えらいことになったもんだね」

「小屋の方の人も、ものかげから声をからして、見物人の方へしずまってくださいいたのむのですが、さつぱりききめなしです。そうかといって、そういう人たちは舞台の前へで

るわけにもいかないのです。見物人の見えるところへでると、たちまち見物人から何かを投げつけられて、けがをしなければなりませんからね」

「雨谷君は、まだけがをしていなかったのかい」

「けがをしていたらしいが、当人は気が変になっっているらしく、けがをしていることがつかないで、なおも舞台の上であばれていたんです。ところが、見物人の席から板ぎれがとんできましてね、これが雨谷の頭にごつんとあたったんです。そこで雨谷はぼったり倒れてしまいました。そしたら、さわぎはきゆうにしまつてしまつたんです。そして見物人たちはどんどん小屋から出ていつてしまいました」

「ははあ、なるほど。雨谷君が死んだと思つたんだな。それで人殺しのかかりあいになるのをおそれて、みんな小屋から逃げだしたんだな」

「そうなんでしょう。とにかくこれで、さわぎはしずまりました。雨谷は、外へかっぎ出され、しんだいじどうしゃ寝台自動車ほんじよに乗せられて、本所の百善病院ひやくぜんびやういんへつれて行かれました。ぼくはそれを見おくつて、そこを引きあげたんです。これがすべてのお話です。」

「そうかい。よくわかつた」

蜂矢探偵は、少年の労ろうをねぎらつたのち、ふと思ひ出したかのように、

「あれはどうしたろうか。問題の文福茶釜の破片はどうしたろう」

「ああ、それはですね。ひとつだけぼくが拾ってきましたよ。いま持ってきました。」

二郎は玄関へ行つたが、まもなく風呂敷包を持って引き返してきた。

「場内でひろつたんですが、たしかにこれは二十世紀文福茶釜の破片の一つです。よく見てください」

「これが、そうなのかい」

蜂矢は、その破片を手にとつて、いくども裏表をひっくりかえして見いった。この破片は、釜のごく一部分であるが、釜のつばもついていた。

「このほかに、茶釜の破片は落ちてなかつたんだらうか」

「さあ。落ちていたかもしれないませんが、ぼくの目にとまったのは、これだけでした」

「そうかい。とにかくこれはいいものを拾つて来てくれた。これは、ぼくのところに保管しておくが、ひよつとすると今夜あたり、これがコウモリのように空中をとびまわるかもしれないね」

「えっ、なんですって」

「いや、なんでもないよ」

蜂矢は、あとをいわなかった。それはじぶんの想像のために、小杉少年を不必要にこわがらせてもいけないと思ったからである。だが蜂矢の想像としては、もしもこの茶釜が、針目博士の作り出した金属Qであったとしたら、たとえそれが今は破片になっているにせよ、いつかは生きかえって、破片ながら動き出すかもしれないと思ったのであった。はたして、蜂矢探偵のこの予想は的中するかどうか。

ふしぎな電話

きゆうにある 家出人事件いえでにんじけんがおきて、そのことについて蜂矢探偵は一生けんめいに走りまわっていたので、れいの茶釜破壊の日から約二十日間を、怪金属事件の捜査から、手をぬいていたのだった。

ようやくその家出人も、ついに探しあてられて、ぶじ家にもどり、蜂矢の仕事も、ここに一段落となった。そこでかれは、ふたたび怪金属事件の方へあたまをふりむけることに

なつた。

この二十日間、さいわいべつに怪しい事件も起こらず、まず泰平たいへいであった。

しかしいろいろなことが、あしぶみをしていた。針目博士の行方の捜査のこと。黒箱の中にはいつていた器械をしらべること。こわれた茶釜の行方をつきとめ、その破片をみんな集めることなどが、きゆうを要することだった。

茶釜の破片あつめは、いまとなつてはどうにも手おくれで、いたしかたがなかった。あの事件の直後、小屋の中をめんみつに探したなら、破片あつめはあるていど、成功したかもしれないのだが、いまとなつて後悔こうかいしても、もうおそかった。

けつきよく、ちゃんとはつきりのこつているのは、小杉二郎少年が拾ってきて、いま蜂矢の書齋の金庫の中にある一破片だけであった。この破片は、もしや奇怪なる生き返りでもして、家の中をコウモリのように飛びまわりはしないかと、気をもませたものであったが、事実そういうことは起こらなかった。まったくしずかに箱の中にはいつているふうの金属片にすぎなかった。蜂矢は、はじめはこれが飛びまわるかと、おそれをなしたものの、飛びまわらないとわかつたいまは、少々がっかりしているふうであった。

雨谷君も、まず正気しょうきにかえつて、いまではふうの人のようになり、退院も間ぢかと

いう話であった。この雨谷君に茶釜の破片を持っているなら、参考のために見せていただきたいと申し入れた。しかし雨谷君のところには、ひとつもないことがわかった。

そうになると、蜂矢の家にある一破片は、いよいよ貴重なものとなった。

ほかの破片は、いったいどこへ行ったのであろうか。

それはたぶん、掃除夫が集めて、じんかいしやうきやくば塵芥焼却場にはこび、そこで焼いてしまったのであろう。

むかしなら、そういうときには、金属材料は大切にあつかわれ、横にのけておいて、製鉄所へ回収されたかもしれない。今はもうおそまつにあつかっているのです、焼いたあとは、灰の中へうずまり、ますます深く地中へうずもれていったことであろう。

もしもあの茶釜の中に、蜂矢探偵が想像したように、生命のある怪金属かいきんぞくがはいっていたものなれば、その生命は、どうなったであろう。

茶釜が破壊したときにいっしょに、怪金属の生命も終ってしまったのであろうか。

いやいや、そうかんたんには断定できないであろう。もともと怪金属は、非常に小さいものであるから、もし茶釜の中にそれがはいっていたとしても、茶釜が破壊したときに、その生命が不運にも二つに折られるようなことは、まずまずないであろう。

そうだとすると、怪金属は、どこかに今も生きている可能性がある。可能性があるとい

うだけのこと、かならず生きているとはいえない。この二十日間、世の中に、怪金属を思い出させるような怪事件が報道されないと、怪金属はあるはずで、死滅めつしてしまつたかもしれないのだ。

蜂矢探偵は、きようは実験室にはいつて、れいの黒箱を解体し、いろいろとしらべている。

かんじんの真空管しんくうかんや同調回路どうちょうかいろがないので、このしらべもなかなか困難であつたが、しかし蜂矢探偵は、持ちまへのやりぬく精神をもつて、こつこつと仕事をすすめていった。すると、とつぜん電話がかかつてきた。

蜂矢は、ドライバーをほうりだして、受話器を取りあげた。異様いようにつぶれた声が聞こえてきた。

「……もしもし。探偵の蜂矢さんは、あんたかね」

「そうです。蜂矢はちやじゆうく十六です。あなたはどなたですか」

「蜂矢君。きみは身のまわりを注意したまえ。ひよつとするときようあたり、おそろしい奴やつがたずねて——」

電話は、そこでぷつりと切れた。そのあといくら電話局に連絡しても、さっきの相手は

ふたたび出なかつた。

通話はあきらめた。

だがこれはおかしなことになった。あやしい客がくるという警告だ。あの通話者は、
 いったい何者だろうか。同情者どうじようしゃなのであるか。それとも脅迫者きようはくしゃがみずから電話
 をかけてきたのであろうか。

ちようどそのとき、玄関の呼鈴よびりんが鳴った。訪問客だ。はたして、さつき電話で注意を
 うけた怪人物の来訪であらうか。それともふつうの事件依頼人じけんいらいにんであらうか。

蜂矢は、玄関へ出て行って、秘密の透視窓とうしまどごしに、外にたっている訪問客のすがたを
 見た。まっ黒な長いマントに、おなじ黒の頭巾ずきんをすっぽりかぶった異様な人物が、まるで
 影のようにそこに立っていた。

蜂矢探偵は、ぎくりとした。

怪少年

何者だろう。ふしぎな服装の訪問客は、顔を頭巾の奥ふかくかくしているので、誰だか見当がつかなかった。

「先生。あやしい人ですよ。おいかえしましょうか」

小杉少年が、蜂矢探偵の方を心配そうな顔で見、そういった。その訪問客は、長い黒マントの下にピストルぐらいかくしていそうであった。とにかく、雨も降っていないのに、なぜあのように、下にひきずるほど長いマントを着ているのだろう。こんな怪しい客はおいかえすにかぎる。

「ちよつとお待ち。怪しいお客なら、特にていねいに応待をして、応接室へご案内しない」

「それでは、あべこべですね。先生、あの長いマントの下から、ピストルがこつちをねらっているかもしれないよ。きつと、そうだ」

「もちろん、こつちは充分に注意をするから大丈夫だ。それにきつき電話で、ききよう怪しい客が行くぞ」と知らせがあつたほどだから、怪しい客にはぜひお目にかかりたい」

「先生はかわっていますね。それではぼぐが玄関へ出ますが、先生はくれぐれも注意をお

「こたらないようにしてくださいよ」

小杉少年は、蜂矢探偵があまり大胆すぎるので、気が気でない。

それから小杉少年は、玄関へとび出していった。玄関をあげる音、それから客と小杉との対話が、客にはわからない秘密屋内電話の線をつたわって、蜂矢のところへ聞こえてくる。

それを聞いていると、怪しい客は、小杉の質問には答えようとはせず、ただすこしも早く蜂矢探偵に会わせてくれ、会うまでは、何にも説明しないとがんばっているようす。

「そんなことでは、先生に取次ぎができません」

というと、怪しい客は、

「そんなら、きみに取次ぎはたのまない。じぶんが奥へふみこんで、蜂矢探偵に面会をとげるであろう」

といって、かれは前に立ちふさがる小杉少年の胸をぼんと押しかえした。すると小杉は、うしろへひっくりかえった。怪しい客は、えらい力ちからもち持もちだった。

怪しい客は、どしどし奥へはいりこんだ。そして蜂矢探偵が書斎にいるのを見つけると、つかつかとその前へ――。

「蜂矢君。茶釜の破片をわたしたまえ」

怪しい客は、しゃがれた声を出して、ぶつきらぼうにいう。

「いったいきみは、誰ですか」

蜂矢探偵は、しずかなことばで、怪しい客にたずねた。

「茶釜の破片をわたしたまえ。いそいで、それをわたしたまえ」

「なぜ、きみにわたす必要があるんですか。それがわからないと、たとえその破片が手もとにあつたとしても、きみにはわたせませんね」

「そんなことは必要ない。早くわたせ」

「きみは礼儀れいぎを知りませんね。人間というものは、いやな命令をされると、ますます反抗したくなるものですよ。けつきよくきみは自分の思うとおりにならなくて、困るでしょう。そういうやりかたは、きみにとってたいへん損ですよ」

「早く破片を手にいれたいのだ。これがきみにわからんのか」

怪しい客は、いらいらしてきたらしく、大きな黒頭巾くろずきんの奥で、しきりに小さな顔をふりたてている。そのとき蜂矢は、怪しい客の顔が、ほんとうの人間の顔ではなく、マネキン人形の首であることを見破った。そのマネキン人形は、かわいい少年の首であった。

人形の首が、なぜ口をきくのか。生きている人間のように、ものごとを考えたり、こつちの話を聞きわけたりするのか。とにかく、これはとんでもない怪物であることが察しられた。

「いや、ぼくは、礼儀を知らない人間とおつきあいをするのは、ごめんです。もちろん、何をおっしゃっても、ぼくは聞き入れませんよ。協力するのはいやです……」

「いうことをきかないと、殺すぞ」

「殺す、ぼくを殺して、なんになりますか。すこしもきみのためにはならない、茶釜の破片をしまつてある場所は、もしぼくが殺されると、きみにおしえることができない。それでもいいんですか」

「ううむ——」

怪しい客は、うなりごえとともに、からだをぶるぶるふるわせて、

「早く出せ。きみが茶釜の破片を持っていることは、今きみが自分でしゃべった」

「たしかに、持っています。話によれば、おわたししてもいいが、礼儀は正しくやつてもらいましょう。まず、そのいすに腰をかけてください。ぼくもかけますから、きみもかけてください」

そういつて蜂矢探偵は、先に自分のいすに腰をおろした。

「わたしは腰をかけることができないのだ」

怪しい客は、うめくようにいった。

「なぜ、きみにそれができないのか。そのわけを説明したまえ。およそ人間なら、誰だつて腰をかけるぐらいのことはできる。きみは、人間でないのかね」

蜂矢は、ことばするどく相手にせまった。

すると怪しい客の全身が、がたがたと音をたてて、大きくふるえだした。怒りに燃えあがつたのか、それとも恐怖きょうふにたえ切れなくなったためか。

恐ろしき笑い声

「もうきみの力は借りない。今まで人間のまねをしていたが、ああ苦しかった。もうこれからはわたしの実力で、必要とするものをさがし出して持っていくばかりだ」

怪^{あや}しい客は、大立腹^{だいらつぷく}らしく、声をあらげて叫んだ。と、かれの頭巾^{ずきん}が、ひとりでうしろへひつばられ、今まで頭巾^{ずきん}でかくれていたマネキン人形の首が、むき出しにあらわれた。

「あッ」

これには蜂矢もおどろいて、思わず声をあげた。にこにこ笑っている木製の男の子の首だ。がそれだけではない。マネキン人形の頭の上に、やかんのふたぐらいの大きさの金属らしい光沢の物体がのつている。それが生きもののように、はげしく息をしている。ふくれたり、ちぢんだり、横に立ったり、形をかえたり。いよいよ怪しいものだ。

「待ってくれ。きみのいうことは、きく。らんぼうするな」

蜂矢は、まっさおになつていすから立ちあがりあとずさりした。今までの落ちつきをうしなつて、日頃の蜂矢には見たくても見られないほどの大狼狽^{だいろうばい}だ。どうしたのだろう。「もうきみと口をきく必要はない。しずかにしている。きみの脳にたいし直接問いたですることがあるんだ。茶釜の破片^{はへん}のかくしてある場所を問いたですんだ。もうきみには答えてもらう必要はない。用がすめば、きみを殺してやる」

「待て、金属Q！ 話が残っているんだ。待ってくれ、骸骨^{がいこつ}の第四号！」

「ふふふ。そこまで、きみは知っているのか。それを知っていながらわたしのじやまを

するとは、いよいよゆるしておけない。いじわるの人間よ。あとできつとかたづけさせてやる」
「まあ待て、きみに一つ重大な注意をあたえる。きみを作った針目博士はちゃんと生きて
いるぞ。博士はきみを逮捕たいはするために、一生けんめい用意をととのえている。それを知っ
ているか」

「針目は死んだ。生きているわけではない。でたらめをいうな」

「博士が死んだと思っていると、きみはとんだ目にあうよ。この前きみが浅草公園あさくさこうえんの
小屋の中で、綱わたりをしていたときに、きみはいつもりっぱに、らくらくとあの芸当げいどう
をやりとげていた。ところが最後の日、きみは綱わたりに失敗して墜落つらくした。そして茶
釜はめちやめちやにこわれてしまった」

「それがどうした。過ぎたことすが」

「きみは、あの日、なぜ綱わたりに失敗して、墜落したかそのわけを知っているのかい。
それをぼくが話してやる。あれはね、針目博士が特殊の電波をもちいてきみをまひさせた
んだ。きみは思いだしてみるのがいい」

「ふーん。どうもおかしいと思った。針目博士が生きているなら、これはぐずぐずしては
いられない。おい、博士はどこにいる」

「知らないよ。ほんとうに知らない。ぼくたちも博士の居いどころ所を探しあてたいと思っ
てるのだ」

「うーん。うそつきどもの集まりだ。よし、おれは他人の力によって征服されるものか。
さあ、仕事だ。茶釜の破片を出せ。いや、きみの返事なんかいらぬ。直接にきみの脳か
らきいてやる」

そういうと、怪しい客——金属Qは蜂矢におどりかかった。

蜂矢はひらりとからだをかわしたが、金属Qはとてす早く、蜂矢は二度目にはねじ伏ふ
せられた。とたんにひどい頭痛を感じた。

「うーッ、苦しい」

「はっはっはっ。金庫の中にしまつてあるのか。もうきみには用はない。いや、殺してや
るんだ」

このとき小杉少年がとびこんできて、ゴルフのクラブで、金属Qのうしろから力いっば
いなぐりつけた。

「ややッ。誰だ」

金属Qは、びっくりしてうしろをふり返つた。そのすきに蜂矢は立ちあがって、いすを

つかんで怪人の足をはらった。怪人は大きな音をたててひっくりかえった。が、すぐさまはね起きると、こんどはふたりには目もくれず金庫の前にとんでいった。すると金庫は、とつぜん火を吹いた。金庫のかたい扉とびらのまん中に大穴があいた。怪人は、その中から、蜂矢のたいせつにしていた茶釜の破片をつかみだした。

「だめだ。これはただの鉄片てつぺんだ。おれがさがしている大切な十四番人工細胞じんこうさいぼうではない。ちえツ、いまましい」

がちやんと、鉄片は床にたたきつけられた。と怪人は大きなマントをひるがえして窓からさつととび出した。

「ああッ、待て」

蜂矢は立ちあがって、窓から外へ手をのぼした。しかしそれはもう間に合わなかった。

「二郎君。怪人の行方ゆくえを監視していてくれ。ぼくは長戸検事ながとけんじのところへ電話をかけるから

……」

蜂矢はいすの背をとびこえて、電話機のところへとんでいった。

怪魔の最後？

怪金属Qが逃げた！

怪金属Qは、長い黒マントに黒頭巾を着て人間の形をよそおい、日比谷公園の方へ逃げた。

怪金属の実体というべきものは、マネキン人形の頭部のでっぺんに乗っている。それを捕えるんだ！

このような知らせが、長戸検事のところへ蜂矢からとどいたので、検事はびくりしたが、かねて待っていたことだから、すぐ手続きをとって、警察力のすべてをあげて怪魔の追跡と逮捕にとりかかった。

連絡の電波は、四方八方にみだれとんで、金属Qの行方をたずねまわる。

「いました。金属Qらしい長マントの怪人が議事堂の塔の上にいます」

「なに。議事堂の塔の上に怪魔がいるというのか」

長戸検事は今は金属Q捜査隊長に任命せられていたので、これを聞くとただちにぜんぶ

の隊員へ放送した。

「手配中の犯人は議事堂の塔上とうじょうにのぼっている。包圍ほういして、取りおさえよ」
命令一下、警官隊は議事堂へむけて突進した。自動車とオートバイとの洪水こうずいだ。それに消防隊が応援にかけつける。

選抜隊が百名、いよいよ屋上へ通じている階段をのぼって、塔のもつとも下の遊歩場ゆうほじょうへ姿をあらわした。

怪魔は、塔の上で、ぐったりとなっている。やっぱり疲れはたたものと見える。風に、長マントがまくれる。黒頭巾くろずきんが、ひとりでこっくりこっくりとおじぎをしているが、これも風のいたずららしい。

附近の建築物の屋上にも、警官隊がぎつしりとのぼって、もし怪魔がこつちへ逃げてきたときは取りおさえようと、手ぐすねひいている。

そのうちに怪魔は気がついたらしく、塔とうの尖端せんたんに立ちあがって、きよろきよろと下をながめまわした。と、思ったら、怪魔はマントの下から、石のようなものを下へばらばらとまいた。それは下にせまっている警官隊のまん中で大きな音をあげて破裂はれつした。警官たちは将棋しょうぎだおしになった。

「うてツ」

警官たちも今はこれまでと、下から銃器じゅうきでもって応じた。上と下とのはげしいうちあいはしばらくつづいた。警官たちは、どんどん新手あらてをくりだして、怪魔を攻めせたてた。怪魔はついにふらふらしだした。

「あ、あぶない」

怪魔のからだだが塔の上からすつとはなれた。

「下へ飛ぶぞ。逃がすな」

大きく弧こをえがいて、長い黒マントの怪魔は議事堂の庭の上に落ちた。そして動かなくなつた。

「とうとう自分でお陀仏だぶつになつたか」

「あんがい、かんたんな最期さいごをとげたじゃないか」

「大事なところを弾丸たまにうちぬかれたのだろう」

怪魔のからだは、ばらばらになつていた。もちろんこれはマネキン人形の手足や胴中どうなかや首であるから、そのはずである。

長戸検事がかけつけ、怪魔のばらばらになつたからだを念入ねんいりにしらべた。

「はてな。なんにもない」

「検事さん、あれがありませんか」

「おお、蜂矢君」

と検事はすしおくれてかけつけた蜂矢をふりかえって、

「あれが見えないよ。人形の首はこのとおりあるが、きみがいったようなやかんのふたみたいなものは見えない」

「もつと徹底的てつていてきにしらべましょう。しかしあれは怪力かいりきを持っていて、危険きわまりないものですから、ぴかりと光つてあらわれたら、すぐ警官隊はそれをたたき伏せなければ、あぶないですよ」

「よろしい」

蜂矢探偵は念入りにしらべた。

だが、やっぱりこわれたマネキン人形のばらばらになった部分のほかに何もなかった。

「あるはずなんだがなあ」

蜂矢は、首をかしげる。

「あれだけが逃げたんじやないかなあ」

「そういう場合もあるでしょう。あなたの部下の誰かが、これを見かけたでしょうか」

「いや、そういう報告はない」

「ふしぎですね」

この謎はとけないままに、その日は暮れた。怪魔はどこへ行ったのであろうか。どこにかくれているのであろうか。

怪魔のばらばらになった遺骸は、どこにどう始末をするか、ちよつと問題になった。けつきよく、やつぱり大事をとって、これを怪魔の死体としてあつかうこととなり、たるに入れ、死体置場の中へはこびこまれ、その夜は警官隊をつけて 厳 重な警戒をすることになった。なんだかあまりにもものしいようであるが、なにしろ相手がえたいの知れない怪物であるだけに、ゆだんはすこしもできなかった。

はたしてその夜ふけて、怪魔の遺骸をにおいてある死体置場に、世にもあやしいことが起こった。

死体置場の怪

死体置場の警戒のために、その部屋に詰めていた警官は、長夜ちようやにわたって、べつに異常もないものだから、いすに腰をおろしたまま、うつらうつらといねむりをしていた。

ところが、とつぜん怪しい物音がして、警官をねむりから引き起こした。

「やッ。今のは、何の音……」

と、すばやく部屋の中を見わたすと、意外な光景が目につつた。

「あッ」

警官は、おそろしさのあまり、全身に水をあびせられたように感じた。

見よ。そこに収容しゆうようされてあつた二つの死体が並べてあつたが、それにかぶせてあつた布ぬのがとり去られてあつた。そして警官が目をそこへやつたとき、男の死体が、上半身をつつーッと起こしたかと思うと、警官の方へ顔を向け、上眼うわめでぐつとにらんだのである。

「わッ」

警官はおどろきの声をたてた。そして気が遠くなりかけた。

すると、その男の死体は、よろよろと立ちあがった。そしてあやつり人形のような動き

かたをして警官の方へふらふらと近づいた。

「南無阿弥陀仏」

警官は、おそろしさに、たまらなくなつて、合掌がっしょうしてお念仏ねんぶつをとなえ、目をとじた。

ばさり。

「うーむ」

ばさりというのは、死体が冷たい手で、警官の横面よこつらをなぐりつけた音であった。

「うーむ」という呻り声うなごえは、とうとうこらえきれなくなつて、その警官が目をまわしてしまつたのである。

その警官は、それから三十分ほど後、交代の同僚がやってきたときに発見され、手当てあてをくわえられて、われにもどつた。

「おお、気がついたか。しつかりしなくちやいかんよ。いったいぜんたいどうしたんだ」

同僚が警笛けいてきを吹いたので、たちまち宿直しゆくちよくの連中がかけつけて、人事不省じんしふせいの警官をとりまいて、元氣をつけてやつた。

「あーッ、おそろしや。死体が棺の中に起きあがつて、ふらふらとこつちへやつてきた。

そしてわたしをにらんだ。わたしは、死体にくいつかれると思った。おそろしい思ったら、気が遠くなって、あとのことはおぼえていない」

「なるほど、そういえば、死体が一つたりないが、どこへ行っただろう」

死体の行方が問題となつて、警官たちはお手のものの捜査を開始した。

しばらくすると、さつき目をまわした警官は、もうすっかり元気をとりもどしたが、行方をたずねる男の死体は、どこにも見あたらなかつた。

ふしぎだ。

どこへ行っただろう。第一、死体が歩くというのはおかしい。

だが、死体がなくなつたことは、まちがいない。出口は、方々にある。そのどこかを抜けて通つたものにちがいない。

死体置場は、さらに念入りにしらべあげられた。そのけっか、二つの新しい発見があつた。

その一つは、議事堂の塔から落ちた怪少年の死体——これは死体といつても、マネキン人形のからだなのであるが——その死体が、それを入れてあつた箱の中にはなく、手や足や胴などがばらばらになつて、箱の外にほうりだされていたことである。

そして、それを集めてみると、マネキン人形の首だけが足りなかったのである。

もう一つのこと。それは、たずねるマネキン人形の首の破片はへんと思われるものが、なくなつた男の死体のはいつていた棺かんのうしろのところに、散らばつて落ちていたことだ。

この二つのことが、なぜ起こつたのか、すぐにはとけそうもなかった。

紛失ふんしつした死体の主は、上野駅のまえで、トラックに追突ついとつされてひっくりかえり、運わるく頭を石にぶつけて、脳の中に出血を起こして頓死とんしした四十に近い男であつて、どこかの何者ともわからず、ただ服の裏側に「猿田さるた」と刺繡ししゅうしたネームが縫ぬいつけてあるだけであつた。職業もはつきりしないが、からだはがんじようであるけれど、農業のほうではなく、手の指や頭部とうぶの発達はつたつを見ても、文筆労働者ぶんぴつろうどうしやでもなく、所持品から考えても商人ではない。けつきよく、わりあい財産があつて、のんきに暮らしている人ではあるまいかと察せさつられた。そして東京の人ではなく、地方から上野駅でおりたばかりのところを、やられたのであろうと思われた。

そのうちに、地方から、「猿田なにがし」という人物の捜査願そうさねがひが出てくるであろう。そうしたらその身分もあきらかになる。それを当局は待つことにして、「猿田」の死体の方は、ひきつづきげんじゆうに捜査をすすめていたのである。

だが、死体の行方は、いつまでたつても知れなかった。

蜂矢探偵の決心

蜂矢探偵は、ようやくからだがあいたので、ひさしぶりに、怪金属Qの事件の方にかかれることとなった。

探偵は、カーキー色の服を着、シャベルとつるはしとをかついで、針目博士邸へ行った。

博士邸は、あの爆発事件で、第二研究室が跡かたなくとんでしまつて以来、住む人は留守番のほかに、検察庁から警官が詰めていたが、その人々もだんだんにへり、最後はただのひとりとなったが、今はそのひとりも常に詰めかけてはいず、三日に一度ぐらい、巡回しゆんにちよつと寄つてみるぐらいだった。

警戒の方も、このくらいかんたんになつてゐることゆえ、世間せけんも、この事件をもちやわ

すれかけていた。

はじめ事件の捜査そうさの指揮しきをとっていた長戸ながと検事けんじは、もちろん、この事件をわすれてはいなかった。ひそかに毎日毎夜、頭をひねるのがれいになっていた。しかし表面にあらわれたところは、検事はやはりこの事件をわすれているように見えた。それは、この事件の捜査を蜂矢探偵に肩がわりをしたので、検事は任務から解放されたのだと、みんなはそう思っていた。

さて、蜂矢探偵のきょうのいでたちや、肩にかついだ道具は、なにを語るであろうか。かれは、これまで針目博士邸につきつぎに起こった怪事件を、くりかえし考えた。そのけっか、結論にたつことができなかつた。

(まだ方程式ほうていしの数かずがたりないんだ)

結論をだすには、まだしらべがたりないところがあることが、はつきりわかつたのだ。そのたりない方程式の一つは、博士の第二研究室あとを掘りかえしてみることである。あの土の下から、かれは何ものかを発見したいと思つていたのであつた。

その爆破跡は、これまでに検察庁やその他の方面の人々の手によつて、いくどとなく念入りに掘りかえされたのだ。しかし、ついに重大なる手がかりと思われるものは、発見さ

れなかつたのである。それなれば、これから遅ればせに、蜂矢が掘ってみたところが、何も出てくるはずがない。ところが蜂矢探偵は、あえてもう一度掘りかえす決心を立てたのだ。

かれは、博士邸はくしていのさびついた門を押し、中へはいった。

貞造ていぞうじいさんに、まずことわっておく必要があると思ひ、かれをたずねた。

「やあ。どなたかね。わしは、このところ腰がいたくて、ずっと寝こんでいますでな。ご用があれば、こつちへずつと入ってください」

貞造は、そういつて、ふとんの中から声をかけた。

そこで蜂矢は中へはいつて、見舞みまいをのべた。それからかんたんに、その後、邸内ていないにおけるかわつたことはないかとたずねた。

「いやあ。さつぱりございませんな。どなたも、ずっと見えませんですよ。あまり静かで、墓地ぼちのような気がしてまいりますわい」

貞造は、そうこたえた。

蜂矢は、それからいよいよ第二研究室のあとに立つた。かれは首をひねって、焼跡やけあとの四隅よすみにあたる所をシャベルで掘つた。下からは土台どだい石らしいものが出てきた。その

角のところへ、かれは竹を一本たてた。それからなわをもちだして、竹と竹とを一直線にむすんだ。

するとなわぼりの中が、第二研究室の跡になるわけであった。

蜂矢は、それをしばらく見ていたが、こんどは別のなわの切れ端はしを手に持って、第二研究室跡のうしろへまわった。そこは、すこしばかりの土地をへだてて、石造りのがんじょうな塀へいが立っていた。そして塀の内側には、樹齡じゆれいが百年近く経ている大きなケヤキが、とびとびに生はえていた。

ちようど、その研究室跡に近いところに一本のケヤキが、むぎんにも枝も葉もなくなつて、まる裸になつて立っていた。それはもちろんあの爆発のために吹きとばされ、焼かれてしまったものであった。

蜂矢探偵は、なわの切れはしを持って、塀と枯れケヤキとの間や、枯れケヤキと研究室跡の外壁がいへきのあつたところと思われるあたりとの間をはかたり、いろいろやつた。そのうちについに答えが出たものと見え、かれはつるはしをふりかぶって、大地だいちへはつしとばかり打ちこんだ。

そこは、枯れケヤキの立っているところから研究室の壁へ向かつて、四十五度ほどな

めに線をひき、そのまん中にあたる地点であった。

かれはどんだん掘った。上衣をぬいで、シャツ一枚になって、えいやえいやと熱心に掘りつづけた。それがすむと、シャベルで土をすくって、わきの方へどかした。

自分の掘っている穴の中へ、かれの頭がだんだんかくれていった。ずいぶん深い穴を掘っている。まちがいではないのか。かれは自信を捨てなかつた。そして探さ四メートル近くにたつしたとき、かれは穴の中で思わず、

「しめた。とうとう見つけた」

と、思わずよろこびの声をあげた。直^{ちよっけい}径七十センチばかりの、マンホールのふたのようなものが掘りあてられたのだ。

かれは、この重い鉄ぶたをあけるために、地上においてきた道具をとるために、穴からはいあがった。ついでに汗をふいて、大きく深呼吸をし、それからポケットから紙^{かみまき}巻タバコを出して火をつけた。

かれは、生まれてはじめて、すばらしい味のタバコを吸ったと思った。かれはしばらくすべてをわすれて、タバコの味に気をとられていた。

「ああ、もしもし。きみは蜂矢君でしたね」

とつぜん、蜂矢のうしろから声をかけた者があつた。それは蜂矢が油断ゆだんをしていたときのことだったので、かれはぎくりとして、手にしていた短かいタバコをその場へとり落とし、うしろへふりかえつた。

そこに立っていた人物がある。誰だつたであろうか。

意外な一人物

蜂矢がふりかえつて顔を見あわしたその人物は、黒い服を着、白いカラーの、しかも昔流行したことのある高いカラーで、きゆうくつそうにくびをしめ、頭部には鉢巻はちまきのようなにぐるぐる縋帯ほうたいを巻きつけ、その上にのせていた黒い中折帽子なかおれぼうしをとつて、蜂矢にあいさつした。

「ほう。やっぱり蜂矢探偵でしたね。わたしをござんじありませんか、針目はりめです」

「ああ、やっぱりそうでしたか」

蜂矢は、うれしそうに目をかがやかして、針目博士にあいさつをかえした。

「なかなかご活躍のようですね。とうとう地下室へはいる口を掘りだされたんですね。感心いたしました」

「これは、ごあいさつです」

と蜂矢はあたまをかいて、

「ご主人がいらつしやるのを知らないままに、わたしが勝手かっなことをしてしまいました申しわけありません。しかし、じつは針目博士は、あの爆破事件のとき、粉碎ぶんさいしたこの研究室と運命をともになすったように聞いていたのですから、もう博士はこの世に生きていらつしやらないと思っていました。いや、これはとんだ失礼を申しまして、あいすみません」

「やあ、さあそれもしかたがありません。わたしはあの事件いらいきようまで、姿をみなさんの前に見せなかつたのですから、そういううわさの出たことはしぜんです。悪くはとりません」

博士は、冷静な顔つきで、そういった。

「どうされたんですか、博士は、つまりあの爆発のときのことで」

「それはさつききみが掘りあてたとおり、第二研究室の床の下には、外へのがれる道がこしらえてあったので、いそいでそれへとびこんで、いちめい命をまっとうしたのです」

「ああ、なるほど」

と蜂矢はうなずき、

「すると第二研究室の床のどこかに、その秘密の地下通路へ通ずる入口があいていたはずですが、それが爆破後、跡をいくら掘ってみても発見できなかったというのは、どういうわけでしょうか」

この質問は、蜂矢探偵ならずとも、この事件に関係した人々なら、誰でも知りたいことの第一であろう。

「それはかんたんなことです。わたしが先へ、その穴へとびこむ。するとそのあとで大爆発が起こり巨大なる圧力でもって、その穴をふさいでしまったんですな。おわかりでしょう」

「あッ、そうか」

蜂矢探偵は、思わずかんたん感歎の声を発した。そうなんだ。大爆発のときに、それ位の巨大な力が出ることは予想のできることであった。それでそうなることを、どうして気がつか

かったのであろう。

「とにかくこれからきみを、その地下室の中へわたしみずからご案内いたしましょう。さつきのところから入ってみますか。せつかくきみが掘ったものだから」

「じゃあ、そうしていただきましょう。おお、博士は頭に繻ほうたい帯たいをしていらつしやるが、どうなすつたのですか——けがでもなさつたのですか」

「ああ、これですか」

と博士はにやりと笑つて、頭へ手をあてた。

「昨夜、じつは某方面にあるわたしのかくれ家を出ようとしたとき、人ちがいをされて、頭をなぐられて、こんなけがをしたのです。まだすこし痛みますが、たいしたことはありませんから、心配しないでください」

蜂矢は、それを聞いて、それはたいへんお気のどくさまとあいさつをした。

それから彼は、博士とともに穴の中へおりていった。重い鉄蓋てつふたを、蜂矢はうまくつりあげて、横へたてかけた。

「さあ、どうぞ」

蜂矢は、博士に先頭せんとうをゆずった。

「きみから先へはいつてください。いいですよ、えんりよしなくても……」

「ぼくには、中の勝手がわかりませんから、博士。どうぞお先に」

「そうですか。では先へはいりましょう」

博士は、先に穴の中へはいった。そして地下道に立って、上を見あげ、

「蜂矢君。何してますか。大丈夫ですよ。おりてきたまえ」

そういつてから博士は、横を向いて、にたりと気味のわるい笑いを頬のあたりに浮かべた。

「じゃあ、おりますよ」

「さあ、早くおりてきたまえ」

蜂矢は、穴へおりた。

だがかれはどうしたわけか、その前に穴の上へ、ほんと手帳をほうりあげた。なぜ手帳を捨てたのであろうか。

それと同時に、木かげに少年の二つの目が光った。小杉二郎こすぎじろう少年の目だった。

意外な工場

「早くおりてこないと、きみの相手にはなつてやらないぞ。わたしにことわりもなく、こんな穴を掘って、けしからん奴だ」

異様な姿の針目博士は、ごきげんがはなはだよろしくない。

もうすこし蜂矢探偵が穴の上でぐずぐずしていたら、博士はほんとうに怒って、ずんずん中へはいつてしまったかもしれない。

ちようどきわどいところで、蜂矢は穴の中へとびこんで、博士のそばに、どすんとしりもちをついた。

「お待たせして、すみません。なにしろ、こんなところに地下道があるなんて、きみのわるいことです。つい、尻ごみしまして、先生に腹を立たせて、あいすみません」

蜂矢は、そういつて、あやまつた。

「はははは。きみは、見かけに似合わず臆病だね。そんなことでは、これからきみに

見せたいと思つていたものも、見せられはしない。見ている最さいちゆう中に気絶きぜつなんかされる
と、やっかいだからね」

博士は、意地のわるいうす笑いをうかべで、そういつた。

蜂矢は、博士のことばに、新しい興味をわかった。それは博士が蜂矢に何か見せたがつ
ているということだ。いったいそれは何であろうか。

「さあ、こつちへはいりたまえ。このドアは、しつかりしめておこう」

博士は、地下道の途とちゆう中にあるドアをばたんとしめ、それにかぎをさしこんでまわした。
蜂矢は、そのときちよつと不安を感じた。しかしすぐ気をとりなおして、力いっばい博士
とたたかおうと思つた。かれは、これから針目博士が彼をどんなにおどろかさうとしてい
るか、それをすでにさとつて、覚悟かくごしていた。

「ほら、こんな広い部屋があるんだ。きみは知らなかったろう」

とつぜん、すばらしく大きな部屋へはいつた。二十坪以上もある広い部屋、天じようは
ひじように高い。そしてこの部屋の中には、えたいの知れない機械がごたごたとならんで
いて、工場のような感じがする。もちろん人は、ひとりもない。

「ここは、なにをするところだか、きみにわかるかい」

針目博士は、からかい気味ぎみに蜂矢に話しかける。

「さあ、ぼくにはわかりませんね」

あの第二研究室の下に、こんなりっぱな部屋があるとは、想像もつかなかった。針目博士という学者は、じつにかわった人だ。

「わからなければ、教えてあげよう。この機械は、金属人間を製作する機械なんだ。つまりここは、金属人間の製作工場なんだ。どうだ、おどろいたか」

「金属人間の製作工場ですって」

蜂矢は、思わず大きな声を出して、問いかえした。博士がこんなにずばりと、金属人間のことを口にするとは予期よきしていなかったのだ。

「そのとおりだ。金属人間をこしらえる工場なんだ。きみは知っているかね、金属人間というものはどんなものなのか？」

博士の方から、かねて蜂矢が最大の謎と思っている金属人間のことに、ずばりとふれきたものだから、蜂矢はおどろきもし、また内心ふかくよろこびもした。

「くわしいことは知りませんが、針目博士が金属Qの製作に成功せられたことは聞いています」

「ははは、金属Qか」

博士はうそぶいて笑った。

「君は金属Qを見たことがあるかね」

蜂矢は、すぐには返事ができなかった。見たと答えるのが正しいか、見ないといったほうがよいか。

「はつきり手にとつてみたことはありませんねえ」

「手にとつてみるなんて、そんなことはできないよ。だが、すこしはなれて見ることはできるのだ。どうだ、見たいかね」

「ぜひ見たいものですね」

「よろしい。見せてやろう。金属Qを、近くによつてしみじみ見られるなんて、きみは世界一の幸運者だ」
こううんもの

そういうと博士は、いきなり上衣をぬぎすてた。チョッキをぬいだ。高いカラーをかなぐりすてた。

その下から、おそろしい大きな傷あとがあらわれた。くびからのどへかけて、はすかいに十センチ近い、大傷を、あらつぽく糸でぬいつけてある。そんなひどい傷をおつて、

死ななかつたのが、ふしぎである。

博士は、ワイシャツもぬぎとばして、上半身はアンダーシャツ一枚になった。

それでもうおしまいかと思つたが、博士はまたつづけた。手を頭の繻帯ほつたいにかけた。それをぐるぐるとほどいた。

「おおッ」

ようやくにしてとれた長い繻帯ほつたいの下からあらわれたものは、頭のまわりをぐるつと一まわりした傷あとであつた。

それを見ると、蜂矢は気絶きぜつしそうになつた。

博士は、蜂矢探偵を前にして、いったい何をする気であろうか。

奇蹟見物

「さあ、よく見るがいい。今、金属Qを、この頭の中から取りだすからね」

博士は、とくいのようすだ。

それにひきかえ、蜂矢探偵はまつさおになり、失心の一步手前でこらえていた。もしもかれが、金属人間事件の責任ある探偵でなかったら、もつと前に目を白くして、ひつくりかえつていただろう。

それから先、博士がしたことを、ここにくわしく書くのはひかえようと思う。くわしく書けば読者の中に、ひつくりかえる人が出るかもしれないからだ。それだから、かんたんに書く。——博士は、両手をじぶんの頭にかけて、帽子をぬぐような手軽さで、頭蓋骨をひらき、中から透明な針金細工のようなものを取りだし、それを手のひらにのせて、蜂矢探偵の目のまえへさしだした。

「うーむ」

と、探偵は齒をくいしばって、博士の手のひらにのっている奇妙な幾何模型みたいなものを見すえた。

あの爆発のおこる前「骸骨の四」だけが箱の中になかった。それで博士があわてだした。そのことを、いま蜂矢探偵は思いだした。

博士はだまつている。気味のわるいほどだまつている。蜂矢は「これは骸骨の四ですか」

とたずねようとして博士の顔を見ておどろいた。なぜなら博士の顔色は、人形のように白かった。生きている人の顔色とは思われなかったのである。

「針目博士。どうしました」

と、蜂矢がさげんだ。

そのとき博士は、いそいで手をひっこめた。そして手のひらにのせていたものを、すばやくもとのとおり頭蓋骨の中におしこんで、両手で頭の形をなおした。それから深呼吸を三つ四つした。すると博士の顔に、赤い血の色がもどってきた。死人の色は消えた。

博士は、そのあとも、しばらく苦しそうに肩で息をしていたが、やがて以前のとおりので態度にかえって、蜂矢をからかうような調子で話しかけた。

「どうです。お気にめましたかね。ところがこつちは、どえらい苦しみさ。ああ、きみをよろこばすことの、なんとむずかしいことよ」

蜂矢は、このときには、ふだんの落ちつきはらったかれにもどっていた。奇々ききかい怪々かいがいなる博士のふるまいである。いったい、なんでそんなことをするのか、その秘密をここでつきとめてしまいたい。

「いま、見せてくださったのがれいの行方不明になった『骸骨の四』ですか」

ずばりと斬りこんだ。

「よく知っているね。そのとおりだ。くわしくいえば、金属Qという名前があたえられた第一号だ。つまり、たくさん作った生きている金属の試作品の中で『骸骨の四』が真っ先に、生きている金属となったのだ、そこでこれを金属Qと名づけた」

「なるほど」

「いま、きみが見たのは、金属Qだけではなくその金属のまわりを、人工細胞十四号が包んでいるものだ。それは金属Qを保護するものなんだ。もっともはじめのころのように、人工細胞十四号は完全に金属Qを包んでいない。欠けている箇所があるのだ。そのために、金属Qはいつも不安な状態におかれてある。ああ、人工細胞十四号がほしい。この上の部屋にはあったんだが、この部屋にはないらしい」

博士は、不用意に歎きのことをもらした。そしてその後で、はっと気がついて、蜂矢をにらみかえした。

「はははは、昼間からねごとをいったようだ。ところで蜂矢君。きみは感心に、気絶もしないでもちこたえているね」

蜂矢はうすく笑った。

「すばらしいものを見せていただきまして、お礼を申します。すると、あなたは、針目博士ですか。それとも金属Qなんですか」

金属Qが、人間の形をしたものを動かしている、その人間は、針目博士によく似ていたが、その人間のからだを支配しているのは金属Qである。ちょうど、金属Qが、二十世にじゅっせい紀文福茶釜きぶんぶくちやがまにこもっていたように。——これが蜂矢のつけた推理だった。

「どっちだと思うかね」

「金属Qでしょう」

「ちがう」

「じゃあ、なんですか」

「針目博士と金属Qが合体したものだ。二つがいつしよになったものだ。しかし、もちろん金属Qは、針目博士よりもかしこいものだから、支配をしているのは金属Qだ。おどろいたかね、探偵君」

博士はそういって、からからと笑うのであった。その笑い声が、蜂矢の耳から脳をつきとおし、かれは脳貧血のうひんけつをおこしそうになった。

恐怖の計画

「気味のわるい話は、もうよそう。こんどはもつと愉快な話をしよう」

博士は、とつぜんそういった。

蜂矢は、いうことばもなく、おしだまっている。

「生きている金属が作られるなんて、すばらしいことではないか」

そういいながら、博士は手ばやくぬいだ服を着て、胸をはって、いかめしく室内を歩きまわりながら演説するような、くちようでいった。

「生命と思考力を持った金属が、人工でできるなんて、愉快なことだ。人間は、もつと早く、このことに気がつかなくてはならなかったのだ。植物にしろ動物にしろ、また鉱物にしろ、それを作っている微粒子びりゅうしをさぐっていくと、みんな同じものからできていんだからね。だから、植物と動物に生命と思考力があたえられるものなら、鉱物にもそれがあたえられていいのだ。そうだろう」

「植物に思考力があるというのは、聞いたことがありませんね」

「じつさいには、あるんだよ。人間の学問が浅いから、気がつかないだけのことなんだ。とにかく植物のことなんか、どうでもよろしい。今は生きている金属のことだけを論ずればいいのだ。金属を人工するのは、他のものをこしらえるよりも、一番やさしいことだ。そして、そのとき生命と思考力を持つように設計工作してやれば、生きている金属ができてあがるのだ。生命も思考力も、電気現象でんきげんしょうにもとづいているのだから、そういうことを知っている者なら、かんたんにやれるのだ」

「なるほど」

「そこでわしは、これからこの部屋で、生きている金属をじゃんじゃん作ろうと思う。そしてそれを人体に住まわせる。かまうことはない、生きている金属は人間よりもかしく、強力なんだから、思いのままに人間を襲撃しゅうげきして、そのからだを占拠せんきよすることができるんだ」

おだやかならない話になったので、蜂矢探偵は、からだをしゃちこぼらせる。そんなことならいつ自分も、そのへんからとび出してきた怪金属のため、からだをのつとられるかもしれないと思えば、不気味ぶきみである。

博士は、そんなことにはおかまいなしに、しゃべりつづける。

「それを進めていくと、この世の中に金属人間がたくさんふえる。たびたびいうとおり、金属人間は、ふつうの人間よりかしこいのだから、金属人間群は、ふつうの人間が百年かかってやりとげる科学の進歩を、金属人間は二、三年のうちにやりとげてしまう。世の中は、急速に進歩発展するだろう。すばらしいことじゃないか、探偵君。ふん、あんまり深く感心をして、ことばも出ないようだね」

そのとおりだった。なんとという奇抜な計画であろう、またなんとというおそろしいことであらう。もしもそんなことができたなら、人間の立場はあやうくなる。蜂矢の背すじにためたい戦慄せんりつが走った。

「まあ、講義はそのくらいにしてこんどはいよいよ、しんけんな話にうつる。きみをここまでひっぱりこんだことについて、説明しなくてはならない。だが、もうきみはかんづいているだろう」

「なんですって」

「きみのからだをもらいたいのだ。わしは仲間のひとりに、きみのからだを世話せわしたいと思うのだ」

「とんでもない話です。わたしはおことわりします」

と、蜂矢はうしろへ身をひいた。まったくとんだ話である。そんな怪金属にこの身を占せんきよされたたまるものか。

「きみがなんといおうと、わしは思ったとおりにやるのだ。じたばたさわぐのはよしたがいいぞ」

博士は、じりじりつつめよってくる。蜂矢探偵は、だんだんうしろへさがって、やがて壁におしつけられてしまった。

「どうするんです。金属Qは、ただひとりのはず。ほかに仲間があるなんて、うそです。きみが、わたしのからだへはいりたいのでしよう」

さすがに探偵は、いいあてた。その事情はわからないが、相手の計画しているところはわかるような気がする。

「ふふふふ、どっちでもいいじゃないか」

いつのまにやら博士の手には、大きなハンマーが握られていた。博士はそれを頭上に取りあげて、今や蜂矢の頭に一撃をくわえようとしたとき、

「待て、金属人間。動くな。動けば生命いのちがないぞ」

と、ひびいた声。

蜂矢はおどろいて、そっちへ目を走らせた。するとこはふしぎ、もうひとりの針目博士が蜂矢をおびやかしている針目博士の方へしずしずとせまってくる。その博士は腕に銃きじゆに似たような物をかかえていた。

ふたりの針目博士だ。どういうわけであろう。

二人の針目博士はりめはくし

針目博士はりめはくしが、ふたりあらわれた。

蜂矢探偵は、わが身の危険も忘れて、しばしふたりの針目博士の顔を見くらべた。

どっちも同じような顔つきの針目博士であった。ちよつと見ただけでは見分けがつかなかった。どっちの針目博士も、青い顔をしている。しかしどっちかという、後あとからあらわれた博士の方がいつそう青い顔をしている。

ところが顔いがいのところを見ると、だいぶんちがいがあつた。蜂矢探偵を壁のところ
にまで追いつめた針目博士の方は、いやに高いカラーをつけて、くびのところが窮屈きゆうくつ
そうに見える。また頭部に縋ほうたい帯たいをしている、その上に帽子をかぶっている。

これにたいして、あとから現われた針目博士の方は無帽むぼうである。頭には縋帯ほうたいを巻いてい
ない。

服装は、蜂矢探偵を追いつめている針目博士のほうは、黒いラシヤの古風こふうな三つ揃ぞろいの
背広をきちんと身につけているのに対し、あとからあらわれた針目博士の方は、よごれた
カーキ色の労働服をつけていた。服はきれいではないが、小わきにりっぱな機銃きじゆうみた
いなものを抱えている。

「動く、これをつかうぞ。すると、金属はとろとろと溶とけて崩壊ほうかいする」

あとからあらわれた針目博士が、はやくちに、だがよくわかるはつきりしたことでい
った。

「待て、それを使うな。わしは抵抗しない」

始めからいた針目博士が、苦しそうな声で押しとどめた。もはや蜂矢探偵の頭上に、一
撃を加えるどころのさわぎではない。かれ自身がすくんでしまったのだ。

「蜂矢さん。もうだいじょうぶだ。横へ逃げなさい」

あとからあらわれた針目博士がいった。

いったい、どっちがほんとうの針目博士であろうか。

蜂矢探偵は、壁ぎわをはなれて、自由の身となったが、この問題を解きかねて、あいさつすべきことばに困った。

「おい、金属Q。こんどは、廻れ右をして壁を背にして、こっちへ向くんだ」

金属Q——と、しきりに、あとからあらわれた博士が呼んでいるのが、はじめからいた方の針目博士のことだった。——ほんとかしら——と、蜂矢は目をいそがしく走らせて見くらべるが、顔はよく似ていて、くべつをつけかねる。

金属Qと呼ばれた方の博士は、しゅしゅ動いて壁に背を向け、こっちへ向きなおったが、とつぜん早口で叫んだ。それは、妙にしゃがれた声だった。

「きさまこそ、金属Qじゃないか。わしは針目だぞ、ごまかしてはいかん。しかし、わしは今、抵抗するつもりはない」

頭に繃帯を巻いた方が、こんどは機銃みたいなものを抱えた方にたいし、金属Qよばわりをするのだった。これではいいよいよどっちがほんものの針目博士だかわからなくなった。

「きみこそ金属Qだ。そんなにがんばるのなら、仮面をはいでやるぞ」

とあとからあらわれた博士が自信ありげにいつて、蜂矢の名を呼んだ。

「なにか用ですか」

「その二セモノのそばへ寄つて、頭に巻いている繻帯をぜんぶほどいてくれたまえ」

と、機銃みたいなものを抱えている博士がいった。

「むちやをするな、傷をしているのに、繻帯をとるなんて、人道にはんする」

と、壁のそばに立っている方の博士が、すぐ抗議した。

「蜂矢君。早く繻帯をとってくれたまえ。繻帯をとつても、血一滴、出やしないから心

配しないで早くやつてくれたまえ」

蜂矢は、ふたりの博士の間にはさまつて、迷わないわけにいかなくつたが、とにかく繻帯をといてみれば、どっちがほんものか二セかがわかるかもしれないと思い、ついに決心して壁の前に立っている博士の頭へ手をのばした。博士は何かいおうとした。がもうひとりの博士が、機銃みたいなものを、いつそうそばへ近づけたので、顔色をさつと青くすると、おとなしくなつた。

蜂矢は、その機に乗じて、長い繻帯をといた。なるほど、繻帯はどこもまっ白で血に染

つているところは見あたらなかった。ただ、その繃帯をときおえたとき、博士の頭部とうぶをぐるつと一まわりして、三ミリほどの幅はばの、手術のあとの癒ゆ着ちやく見たいなものが見られ、そのところだけ、毛が生えていなかった。

なお、もう一つ蜂矢が気がついたのは、額ひたいの生えぎわのところの皮が、妙にむけかかっているように見えることだった。そのとき、後からあらわれた博士の声が、いらだたしく聞こえた。

「蜂矢君。こんどは、その高いカラーをはずしたまえ」

「カラーをはずすのですね」

はじめから博士の特徴とくちゆうになつていたその高いカラーを、蜂矢は、いわれるままに、とりはずした。すると蜂矢探偵は、そこに醜みにくい傷きずあとを見た。短刀たんとうで斬きつた傷のあとであると思つた。いつ博士はこんな傷をうけたのであろうか。すると、またもや、あとからあらわれた博士がいちだんと声をはりあげて、蜂矢に用をいいつけた。

「つぎは、その男の面つらの皮かわをはぎたまえ。えんりよなく、はぎ取るんだ」

「顔の皮をむくのですか」

蜂矢は、おどろいて、命令する人の方をふりかえつた。あまりといえば、惨酷ざんこくきわま

ることである。

落ちた仮面

「わけはないんだ。それ、その男の額ひたいのところに、皮がまくれあがっているところがある。それを指先でつまんで、下の方へ、力いっぱいはぎとればいいんだ」

なんとこの惨酷な命令だろうと、蜂矢は、この命令を拒絶きよぜつしようと考えたが、ちよつと待った、なるほどそれにしておかしい額ぐあひぎわの皮のまくれ工合ぐあひだ。

(ははあ。さては……)

と、かれはそのとき電光のように顔の中に思い出したことであつた。もうかれは躊躇ちゆうちしていいなかつた。いわれるままに、そのまくれあがつた額ぐあひのところの皮を指でつまんで、下へ向けてひっぱつた。

すると、おどろいたことに、皮は大きくむけていった。皮の下に、白い皮下脂肪ひかしぼうや赤い

筋肉があるかと思いのほか、そこには、ごていねいにも、もう一つの顔面がんめんがあつた——
 蜂矢探偵の手にぶらりとぶら下がつたものは、なんと顔ぜんたいにはめこんであつた精せいこ
 巧うなるマスクであつた。

そのマスクの肉づきは、うすいところもあり、またあついとところもあり、人工樹脂じんこうじゆしで
 こしらえたものにちがひなかつた。

マスクのとれた下から出てきた新しい顔は、どんな顔であつたらうか。

それは針目博士とは似ても似つかない顔であつた。頬骨のとび出た、げじげじ眉まゆのぺち
 やんこの鼻をもつた顔であつた。

「あッ」

蜂矢探偵は、あきればててその顔を見守つた。

はじめから、高いカラーをつけた針目博士を、怪しい人物とにらんではいたが、まさか
 こんな巧たくみな変装へんそうをしているとは思わなかつた。

しかもマスクの下からあらわれたその顔こそ、前に警視庁の死体置場から、国会議事堂
 の上からころがり落ちた動くマネキン少年人形の肢体したいとともに、おなじ夜に紛失ぶんしつした猿
 田の死体の顔とおなじであつたから、ますます奇怪きかいであつた。

これで見ると、蜂矢探偵をこの地下室へ案内した針目博士こそ、金属Qのばけたものであると断定して、まちがいないと思われる。怪魔金属Qは、議事堂の塔の上から落ちて死体置場に収容せられたが、夜更よふけて金属Qはそろそろ動き出し、身許不明の猿田の死体の中にはいいこみ、そこをどうにか逃げ出したものらしい。そういうことは、金属Qの力と智恵とでできないことではない。その上で、彼はおそらくこの針目博士の地下室へもぐりこみ、そこで針目博士そつくりのマスクを作ったり、健康を早くとりもどすくふうをしたり、博士の古い服を盗み出して着たり、その他いろいろの仕事をやりとげたのであろう。

まことにおどろくべき、そしておそるべき怪魔金属Qであった。

こうして、始めにあらわれた針目博士の正体が金属Qであるとすれば、あとからあらわれた針目博士こそ、ほんものの針目博士なのである。そう考えて、この際さいまちがいないであろう。蜂矢は、その方へふりかえった。

「これでいいですか、針目博士」

すると機銃きじゆうみたいなのを、なおもしつかり抱かかえている針目博士が、

「それでよろしい。どうです。わかったでしょう。かれこそニセモノであったのです。まったく油断もならぬ奴です。もともとわたしが作った金属Qですが、まったくおそろしい

奴です」

と、博士は顔を青くした。

「どういうわけで、あなたに変装したのでしようか。何か、はつきりした計画が、金属Qの胸の中にあるんでしようか」

蜂矢探偵は、そういつてたずねた。

あとになって考えると、蜂矢のこの質問は、あんまり感心したものでなかった。そんな質問はあとでゆつくり聞けばよかつたのである。それは不幸なできごとの幕あきのベルをならしたようなものだった。

「それはですね。金属Qという奴は——」

と、博士が蜂矢探偵の質問に答えはじめたとき、機銃のような形をした人工細胞破壊銃いじゆうをかまえた博士に、ちよつと隙すきができた。人工細胞破壊じんこうさいぼうはか

この人工細胞破壊銃というのは、その名のとおり、人工細胞にあてると、それをたちまちばらばらに破壊しきる装置で、強力に加速された中性子ちゆうせいしの群れを、うちだすものだ。

かねて博士は安全のために、こういうものが必要だと思い設計まではしておいたのであるが、「生きている金属」を作る研究の方をいそいだあまり、実物はまだ作っていなかった。

その後、金属Qがあばれるようになって、博士はかくれて、この人工細胞破壊銃の製作に一生けんめい努力したのだ。そのけっか、きよようの事件に間にあったのだ。

が、今もいったように、博士の手許にわずかな隙ができたのだ。

「ええいッ」

とつぜん金属Qが身をひるがえして、前へとびだした。そしてかれは、博士の抱えていた破壊銃の銃先を、力いっぱい横にはらった。

「あッ」

と、博士が叫んだときは、もうおそかった。破壊銃は博士の腕をはなれて横にすつ飛び、旋盤の方をとび越して、その向うに立っていた配電盤にがちやんとぶつかった。もちろん破壊銃は壊れた。ガラスの部分がこなごなになって、あたりにとび散った。

金属Qの始末

「なにをするツ」

と、針目博士が、どなる。

「銃はこわれた。こうなりや、こつちのものだぞ」

金属Qは、はんにやのような形相になって、博士にとびついていった。

大乱闘だいらんとうになった。ものすごい死闘しとうであった。金属Qの方が優勢ゆうせいになった。かれは、

どこから出るのか、くそ力を出して、手あたりしだい、工具であろうと、器具であろうと、何であろうと取つて投げつける。

蜂矢探偵は、このすごい闘いの外にあつた。かれはしばし迷つた。仲裁ちゆうさいすべきであ

ろうか、それとも針目博士に味方すべきであろうかと。

針目博士は、はじめのうちは、器物きぶつを投げることを控ひかえていた。しかし相手がむちやくちやにそれを始め、わが身が大危険となつたので、博士はついに決心して、手にふれたものを相手めがけて投げつけた。もう一物のよゆうもないのだ。死ぬか、相手を倒すかどつちかだ。声をあげて蜂矢探偵に協力を頼むひまもない。

ここに至つて蜂矢探偵も心がきまつた。

(ここはいちおう、正しい博士に味方して、仮面をはがれた相手を倒さなくてはならない)

蜂矢探偵は、すぐ目の前の台の上においてある大きなスパナをつかんだ。それをふりあげて、金属Qになげつけようとした。そのとき遅く、かのとき早く、どしんと正面から腰こ掛しかけがとんできて、

「あッ」

と蜂矢が体たいをかわすひまもなく、ガンと彼の頭にぶつかった。かれは、一声うなり声をあげるとうしろへひっくりかえり、そのまま動かなくなった。

それから、どのくらいの時間が流れたかわからないが、蜂矢はようやく息をふきかえした。ずきずき頭が痛む。それへ手をやってみると大きなこぶができていた。血もすこし出ていた。しかししたいしたことではないようだ。

蜂矢はふらふらと起きあがった。

その気配けはいを聞きつけたか、部屋の一隅いちぐうから声があつた。

「ああ、気がついたかね、蜂矢君」

「やッ」

蜂矢は、どきんとしてその声の方を見た、そこには針目博士がいた。博士は頭部にぐるぐると繃帯を巻いていた。その正面のところは赤く血がにじんでいた。

「安心したまえ、怪物は、とうとうくたばったからね」

そういつて博士は、自分の前を指さした。そこには、れいの金属Qが倒れていた。

「死んだんですか」

「いや、まだ油断がならない。金属の本体を取り出して、始末しないうちは、ほんとうの意味で金属Qは死んだとはいえないのだ、今それを始末するところだ。きみは見物していいたまえ」

そういつて博士は前かがみになって、たおれた人の頭のところでごそごそやっていたが、やがてうす桃色をしたぐにやりとしたものを両の手のひらにのせて、部屋のまん中へ出てきた。それは脳みみたいなものであった。

「それは何ですか」

と、蜂矢はたずねた。

「この中に、金属Qの本体がはいっているんだ。はいとこ、これを焼き捨てる必要がある。そうでないと、金属Qはまた生きかえってくる。生きかえられたんでは、また大きわぎになる」

博士は、大きな硬質ガラス製のピーカーの中に、そのぐにやりとしたうす桃色のものを

入れた。それからガスのバーナーに火をつけ、その上に架台かだいをおき、架台の上に今のビーカーを置いた。

それから博士は、薬品戸棚のところへ行つた。

博士が、棚から薬品のはいつた瓶を三つも抱えてもどつてくるまでの少しの時間に、蜂矢は部屋の隅にたおれている人のようすを知るために、その方へ目を走らせた。その人は、もちろんしずかに伸びていた。そしてその頭部が開かれ、頭骸骨がお碗わんのようになって、中身が空虚くうきよなことをしめしていた。

怪金属Qがやどつていた肉体は、ふたたびもとの死体に帰つたのである。

ぱつと茶褐色ちやかっしょくの煙があがつた。れいのビーカーの中である。博士が、液体薬品のはいつた瓶の口をひらいて、ビーカーの中へそそぎこむたびに、茶褐色の煙が大げさにたちよぼるのだった。金属Qがはいっているという脳髄は、ビーカーの中で、沸々ふっふっと沸騰ふっとうする茶褐色の薬液やくえきの中で煮られてまっくろに化かしていく。

「これでいい、もうこれで、金属Qは生存力を完全にうしなつた。やあやあ、骨を折らせやがった。おお、蜂矢君。もう安心していいですよ」

博士は、そういつて、蜂矢の方へにやりと笑つてみせた。

そのときであった。この部屋の戸が外からどんとどんと、われんばかりにたたかれた。

「あける、あける、検察庁の者だ」

長戸検事の声らしいものもまじっている。

大会見

「おおッ……」

博士は、その場にとびあがり、おどろきの色をしめした。そしてきツとからだを壁ぎわにひいて、乱打らんたされている戸をにらみつけた。

蜂矢は、博士がいやにおどおどしているのを見て、気のどくになった。

「針目さん。心配しなくてもいいですよ。長戸検事たちがきてくれたのでしよう」

「わたしは、なにも心配なんかしていない。しかしなぜ今ごろ、長戸検事がこんなところへ来たのか、わけがわからない」

博士は口ではそういつたが、蜂矢の目には、博士がやつぱり胸をどきどきさせているように思われた。

「わけはわかっているのです。さつきぼくが、ニセの針目博士にここへつれこまれるのを小杉少年が見ている、いそいで検事に知らせたのでしよう。それで検事がぼくを助けにきてくれたのですよ。戸をあけてもいいですか」

「ふーん」

針目博士は、しばらくうなづいていたが、

「それなら、戸をあけてよろしい。しかしこの部屋の中で、わたしにことわりなしに、勝手なことをしないように誓わせておくんだな。でなければ、わたしはすぐさま検事たちを追いますから、そのつもりで」

と、きびしく申しわたした。

蜂矢は、うなづいて、戸のところへ行つて向う側へ声をかけ、やはり長戸検事たちであることをたしかめたうえで、かけ金かねをはずして戸を開いた。

「やあ、先生。よく生きていてくれましたね」

まっ先にとびこんできたのは小杉少年であった。少年は蜂矢の胸にとびついて、喜びに

目をかがやかした。

「よう、蜂矢君。どうしたんだ」

そのうしろに長戸検事の緊張した顔があった。ことばつきはやさしいが、蜂矢と室内をかわるがわるにながめて、一分のすきもなかった。

そこで蜂矢は、かいつまんで、この部屋へはいつてからの、いきさつを説明した。そして、

「……そういうわけで、怪人Qは、その製作者であるところの針目博士の手で、あのとおり焼きすてられたのです。どうか、くわしいことは博士にたずねてください。しかしです、博士はいま、かなり興奮しているようですから、腹をたてさせないように気をつけたいですよ」

と、かれとしての説明を終った。

そこで針目博士と長戸検事の会見となったわけであるが、検事はよく蜂矢の忠告を守って、ひきつれてきた部下たちをしずかに入口にならばせておくだけで、捜査活動は自分ひとりでやることにした。

「ずいぶん、しばらくお目にかかりませんでしたなあ、針目博士」

「そうでした、そうでした。で、きょうは何用あつて、ここへきたのですか」

博士はすぐ質問の矢をはなつた。

「それは、あなたにお目にかかつて、怪人Q事件について、最初からもう一度、説明をしていたためです。われわれは正直に告白しますが、これまでの捜査はみんな失敗でありました。それに気がついたので、いままでの努力を惜しいが捨てまして、はじめから直すことにきめたのです。おいそがしいでしょうが、もう一度われわれの相手になつていただきたい」

と、長戸検事は、むきだしにのべて、博士にたのみこんだ。

「わたしはいそがしいんで、頭のわるい検察当局の尻ぬぐいなんかしてられないのです。わたしを待つている重大な問題がたくさんある——いや、これはすべてわたしの研究に関する問題のことであつて、しゃばくさい刑事のことじゃありませんよ。だから、わたしとしては、きみの申し入れをおことわりするのが、あたりまえだ。だが、せっかく来たことでもあるし、わたしもたいへんやつかいにしていた金属Qが、あのとおり完全に分解して、生命を失つたことゆえ、みじかい時間ならばきみの申し入れをきいてあげてもよい。できるだけかんとんに、ききたいことをのべたまえ。われわれの会話は、十五分間をこえない

のを条件とする」

博士は、いやに恩にきせて、長戸検事の申し入れをきいてやるといった。

「では、さっそくお願いしましょう。議事堂の塔の上から落ちて、からだバラバラになったマネキン人形がありました。あれにも怪金属Qがついていたのでしょうか」

「わかりきった話です。Qがああマネキン人形を動かしたんでなければ、マネキン人形があんなにたくみに動くことはない」

「すると、文福茶釜ぶんぷくちやがまとなつて踊つてみせたのも、やっぱりQのなせるわざですか」

「それも明白めいはいはく。あの二十世紀文福茶釜、じつはアルミ製の釜だが、あの中にQがまじっていたのです。そうでなければ、釜が踊つたり綱わたりができるものではない」

「なるほど、では、なぜQが茶釜になつたのですかな」

「針目博士邸——いやこの研究所からとび出したQがねえ、きみ、道ばたで、アルミの屑くずかなんかをふとんにして寝ていたんだ。Qは金属だから、金属をふとんにしたほうが気持よく眠られる。そこで寝ていたところを、人がひろつて屑金問屋へ持っていったんだ——いったんだろうと思う。Qは金属がたくさん集まっているので、いい気になって、その中に寝てくらしているうちにある日、熔鋳ようこうろ炉の中に投げこまれ、出られなくなった。その

うちに、鑄型いがたの中につきこまれ、やがて、かたまってお金になっちまった。そうなるとうちがでできない。やむをえず、文福茶釜を神妙につとめたんだというわけ。そんなところだろうと思う」

博士は、まるで見てきたように、かたつてきかせたのであった。もう時間は残りすくない。

Qの興奮こうふん

「文福茶釜が綱から落ちてこわれたのはどういふ事情でしょう。あれは博士が何か器械をつかって茶釜を落としたというわさもありますかね」

「そのとおり、博士、いやわしは、見物席にまじっていて、Qの運動の自由をうばう特殊電波を茶釜にむけて発射した。そこで茶釜は落ち、こわれてしまったというわけ。わしはあんなあやしげな見世物みせものを、一日も早くなくしてしまわないといけないと思って、思いき

つてそれをやったのだ」

「あなたが、その場からお逃げになったのはどういうわけです。逃げなければならぬ理由はないと思いますがね」

「なあに、あの場でわあわあさがれるのがいやだったからだ。それにわしは——わたしはぼろ服をまとつて変装していたのでね。新聞記者にでもつかまれば、いいネタにされてしまうから、こいつは逃げるにかぎると思つて逃げたんだ」

博士の説明は、水を流すように、よどみがなかった。

「まあ、それで——茶釜がこわれたので、Qは解放されて、自由に動きまわれるようになったのですね」

「そのとおりだ。それでマネキン人形をつけて、それをあやつるようになったんだが、その途中Qは、じぶんのからだの一部分が欠けていることに気がつき、それを一生けんめいにさがしてあるいた形跡がある。そこにいる蜂矢君のところへも、Qはおしかけたようだ。そうではなかったかね、蜂矢十六先生」

さつきから蜂矢十六は、検事と博士を底^{てい}辺^{へん}の二頂^{にち}点^{ちやうてん}とする等辺三角形の頂点の位置に腰をかけて、からだをかたくして聞いていたが、とつぜん博士に呼びかけられて、はっ

とわれにかえった。

「ああ、そんなこともありました。博士のおっしゃるとおりです」

博士はまんぞくそうにうなずいた。

「なぜ、Qはここから逃げ出したのでしょうか、ここにいれば一等安全でもあり、おもしろい目にもあえるし、博士からもかわいがられたでしょうに。どうしてでしょうか」

と、長戸検事は、博士が息つくひまもないほど、すぐさま質問の矢をはなった。もうあと一分間ばかりで、約束の時間がきれる。

「それはきみ、すこしちがっているよ。Qはここにおられなくなったんだ。かれは殺人をやって、ひどく興奮したんだ。その殺人は、かれが計画したものではなく、ぐうぜん、若い女を殺してしまったので、かれの興奮は二重になった。そこへ警官がのりこんでくるし、かれはいよいよあわてた、かれは生きものなんだから、そのように興奮したり、あわてたりするのは、あたりまえだ。そうだろう」

「ごもつともなご意見です」

「かれはね、Qとして生命をえて、うれしくてならない。第二研究室の中で、ひとりぴんぴんとびまわっていたのだ。このときわしは二つの失策をしている。一つは、Qがそんな

に活動的になつてゐることを知らなかつたんだ。まだまだ、クモがはうぐらいのものだと思つてゐた。ところが實際は、Qは三次元空間さんじげんくうかんを音よりも早くとびまわることができたんだ」

「なるほどなあ」

「よろしいか。それから二つには、わしはうつかりしてゐて、かれQがかぎ穴から抜け出せるほど小さくて細長いからだを持つてゐることを考えずにいたんだ。だから、ある夜、Qはかぎ穴から外に広い空間があることに気がつき、かぎ穴から抜け出したのだ。つぎの室にはわしがいたが、ちようど文献ぶんけんを読むことに夢中になつていたので、Qはそのうしろを抜けて、戸のすき間から廊下へ抜け出した。わかるだろう」

「ええ、よくわかりますとも」

「それからお三根みねさんの部屋へはいりこんだ。めずらしい部屋なので、Qはよろこんで踊りまわつてゐると、お三根が寢床ねどこから起きあがつた。水を飲みに行くつもりか、かわやへ用があつたのか、とにかく起きあがつたところへ、Qがとんでいってお三根ののどにさわつた。Qのからだはかみそりの刃はのようにするどいので、お三根ののどにふれると、さつと頸動脈けいどうみやくを切つてしまつたのだ。思いがけなく、Qは人間の死ぬところを見て興奮し

た。そして、朱にあけそまって死んでいくお三根のまわりを、なおもとびまわったので、お三根のからだのほうぼうを傷つけた。どうだ。わかるかね」

「よくわかります。それだけよくごぞんじだったのに、あなたはなぜはじめに、そのことをわれわれに説明してくださらなかったのですか」

「おお……」

と、博士はうめいた。

「これは最近になって、わしがつけた結論なんだ。事件当時には、わしもあわてていて、なにも判定することができなかつたんだ」

博士の話は、なかなか鋭いところをついていた。思いがけない殺人に、みずから興奮してあわてたQは、お三根の部屋でうろうろしているうちに、すっかり疲れてふとんのすそに眠ってしまったところを、川内警部がぎゆうと踏みつけたので、Qはおどろいて目をさまし、とびあがった。そのときかみそりのように鋭いQが、警部の左の足首にさわったので、さつと斬ってしまったのだ。

Qはいよいよおどろき、戸口から廊下へとび出し、もとの研究室へひきかえした。そのとき田口警官が、廊下をこっちへやってくるのとすれちがった。すれちがうとたんに、Q

は田口の右ほおにさわって斬ってしまった。

そこでQはますますあわて、その建物から外へとびだした。そうして人に拾われるようなことになったのだ。

と、博士は見ていたように、話をしたのである。

その話の間に、約束の時間は過ぎてしまった。だが博士は、それに気がつかないのか、しゃべりつづけた。興奮の色さえ見せて、かたりつづけたのであった。

大団円

「おどろきました、感じいました」

と、長戸検事は 厳 肅げんしゆくな顔になっていった。

「あなたは どうしてそこまで、おわかりになったのでしょうか。Qをお作りになったのは、あなたであるにしても、Qの行動をそこまでくわしく知る方法とか器械があるのでしょ

か」

博士は、はつとしたようすだった。きゆうにふきげんになった。そして腕時計を見た。

「おお、もう約束の十五分間は過ぎている。会見は終りにします。これ以上、なにもしゃべれません。さあみなさん、出ていってもらいましょう。はじめからの約束ですから」

だんだんと語勢ごせいを強くして、博士は手をあげ、戸口とぐちを指した。

「わたしのいまの質問は、いちばん重要なものですから、きょうの会見のさいごに、それだけはお答えください」

検事は、くいさがる。

「おたがいに約束は守りましょう。さあ、いそいで帰ってください」

と、博士は、ますますこわい顔つきになって、検事をにらみすえた。

「まあ、もうしばらく待つてください。博士、もしあなたがこの答えをなさらないと、あなたは不利な立場におかれますが、かまいませんか」

「答えることはしない。何者といえども、わしの仕事をじやますることをゆるさない。じやまをする者があれば、わしは実力を持って容赦ようしゃなくその者を、外へたたき出すばかりだ」

博士の全身に、気味のわるい身ぶるいが起こった。

蜂矢十六は、このとき検事のうしろに、びたりと寄りそって、なにごとかを検事に耳うちした。それを聞くと検事は夢からさめたような顔になって、うなずいた。検事は、博士に向かつて、ていねいに頭をさげた。

「たいへん失礼をしました。おゆるしくください。それでは、わたしどもはこれでおいとまいたします。また明日、五分間ほどわれわれに会っていただきたいと思いますが、いかがですか」

「ばかな。もう二度ときみたちの顔を見たくない。早く出ていくんだ」

「ああ、たつた五分間です。それも博士のご都合のよろしい時刻をいつていただきます」
「いやだ。帰りましたまえ」

「すると明日はご都合がわるいのですかな。どこかお出かけになりますか」

「よけいなことを聞くな」

「では、明後日にどうぞお願いします」

「じゃ、明日会うことにしよう。午後二時から五分間、時刻と面会時間は厳^{げん}守^{しゅ}だ」

とつぜん博士が態度をかえて、いったんことわった明日の会見を約束した。検事はほつ

とした。

博士もなんとなくなごやかな顔にもどった。

「では、失礼しましょうや、長戸さん」

蜂矢がうながした。博士に一礼すると、カバンを抱える^{かか}ようにして、戸口から外へでた。さて、その翌日のことだったが、きのうとおなじ顔ぶれの長戸検事一行が、針目^{はりめ}博士^{はくして}邸^いへ向かった。もちろんその中に蜂矢探偵もまじっていた。その蜂矢は、いつになく元気がなかった。

「おい、蜂矢君。どうしたんだ。元気をだすという約束だったじゃないか」
気になるとみえ、長戸検事は蜂矢のそばへ行つて肩を抱えた。

蜂矢は苦笑した。

「どうもきようは調子が出ないのです。ぼくだけ抜けさせてもらえませんか」

「それは困るね。ここまでいつしよにきたのに、いまきみに抜けられては、おおいに困るよ」

と、検事はいつて、蜂矢の顔をのぞきこんだが、蜂矢はほんとうにすぐれない顔色をしているので、検事はきゆうに心配になつて、

「うむ、蜂矢君。抜けていいよ。早く帰って寝たまえ。あとからいむかん医務官を君の家へさし向けてあげる」

といつて、蜂矢が一行とはなれることをゆるした。そこで蜂矢はとちゆうからひきかえした。

ところが、検事一行が博士の門の手前、百メートルばかりのところまで近づいたとき、
「おーい、おーい」

と後から呼ぶ者があつた。一同が振り返つてみると、いがいにも蜂矢が追いかけてくるのだった。

「どうした、蜂矢君」

蜂矢は息を切つて、さつきかれひとり抜けようとしたことをわびた。そしてかれのせつなる願いとして、午後二時五分過ぎまでは、ぜつたいに博士邸に、はいらないことにしてくれといった。検事はおどろいて、その理由の説明を蜂矢にもとめた。

「なにも聞かないで、二時五分まで待つてください。なんにもなかつたら、そのときはぼくはあなたがたにあやまってわけを話します」

検事は、蜂矢を笑おうとしたが、思いとどまつた。そして部下たちとともに、博士邸の

門から三十メートルほど手前の空地あきちにはいつて、休憩をとった。

おそるべき事件が、午後二時を数秒まわったときに発生した。

それは第二の爆発事件だった。天地のくずれるばかりの音がして、博士邸からはものすごい火柱が立った。もし一行が、博士に約束したとおり、その時刻、博士の研究室にはいつていたとしたら、どうであろう。長戸検事以下の警官たちも蜂矢十六も、一瞬にして貴重な生命をうばい去られたことだろう。

いったい何故なにゆえに第二の爆発が起こったのであろうか。それは前回のものよりもはるかに強烈なるものであつて、博士邸をまったく粉砕ふんさいしてしまったのをみても、そのはげしさがわかる。事件後焼跡やけあとに立った一同は、カツパのような顔色にならない者はなかった。ふしぎにも針目博士はすがたをあらわさなかった（いや、その後も博士は引き続いて、すがたをあらわさないのだ）。前日より、いささか考えるところがあつて、ひそかにこの邸のまわりに私服警官数名を配置し、博士の行動を監視させておいた。ところが、かれら監視当直の者の話では博士はずつと邸内にとどまっていたらしく、けつして外出しなかつたそうである。

「蜂矢君。きみはどうしてこんどの爆発を予知したのかね」

検事は、うしろをふりかえって、生命せいめいを拾うきっかけを作ってくれた探偵にたずねた。

「わかりませんねえ。ただ、さつきはきゆうに気持が悪くなったんです。いまはなんともありません。これは一種の第六感ではないでしょうか」

「きみの第六感だね。なるほど、そうかもしれない」

いつもならまっこうから、ひやかす長戸検事が、笑いもせず、そういつてうなずいた。

「とにかくきみもぼくも、きのう博士をうさんくさい人物とにらんでいたことは、意見一致のようだね。そうだろう」

「そうです。かれこそ、怪金属Qにちがいありません。Qは、ほくが気絶きぜつしている間に、

本当の針目博士を殺し、そして博士の頭を切り開いて、じぶんがその中へはいりこみ、あとをたくみに電気縫合器でんきぬいあわせきかなにかで縫いつけ、ぼくが気がついたときにはすっかり、針目博士にばけていたのにちがいありません」

「そうだ。そうでなくては、われわれを呼びよせて、みな殺しにする必要はなかったはずだ。もし本当の博士だったとしたらね」

「本当の博士なら『わし』などとはいわず『わたし』というはずです。それから話のあいだに、博士であることをわすれて、Qが話しているような失策を二度か三度やりましたね」

「そうだった。そんなことから、Qはぼくたちを生かしておけないと考え、きゆうにきよ
うの午後二時かつきり、時刻厳守じこくげんしゅで会うなんていいだしたのだろう。どこまでわるがし
こい奴だろう」

このとおり長戸検事と蜂矢探偵の意見はあつたようだが、はたしうる一点はそのとおり
かどうか、いま、にわかにはつきり断言はできない。

もしも万一、ふたりの説がほんとうで、怪金属Qが第二の爆発をのがれて、生命せいめいをまっ
とうしているとしたら、そのうちにきつと奇妙な事件がおこり、新聞やラジオの大きなニ
ュースとして報道されるだろう。諸君は、それに細心さいしんの注意をはらっていなくてはなら
ない。これは常識をこえたあやしい出来事だと思ふものにぶつかつたら、なにをおいても、
検察当局へ急報するのが諸君の義務であると思う。

Qは、人間よりもすぐれた思考力と、そして惨酷ざんこくな心とを持っているので、もしかれ
が生きていたなら、こんどは始める仕事は、われわれの想像をこえた驚天動地きょうてんどうちの大事
件であろうと思う。

ただに日本国内だけの出来事に注意するだけでなく、広く全世界、いや宇宙いっばいに
も注意力を向けていなくてはならない。

大^{だい}魔^{まり}力^{よく}を持つた人^{じん}造^{ぞう}生^{せい}命^{めい}の主人^{しゅじん}公^{こう}Qこそ、小さい日本^{にっぽん}だけを舞台^{ぶたい}にして満足^{まんぞく}しているような、そんな小さなものではないのだから。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第12巻 超人間X号」三一書房

1990（平成2）年8月15日第1版第1刷発行

初出：「サイエンス」

1947（昭和22）年12月～1949（昭和24）年2月号

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2001年12月28日公開

2006年8月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金属人間

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>